



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 16, 1997, No. 5

代表

野田 研一 (立教大学)

副代表

高田 賢一 (青山学院大学)

大神田 丈二 (山梨学院大学)

書記

土永 孝 (北海道大学)

高橋 勤 (九州大学)

会計

成田 雅彦 (専修大学)

赤嶺 玲子

監事

秋山 健 (プール学院大学)

運営委員

宮下 雅年 (北海道大学)

石幡 直樹 (東北大学)

石井 倫代 (芝浦工業大学)

太田 雅孝 (大東文化大学)

岡島 成行 (讀賣新聞)

笹田 直人

巽 孝之 (慶應義塾大学)

外岡 尚美 (青山学院大学)

中村 邦生 (大東文化大学)

村上 清敏 (金沢大学)

西村 頼男 (阪南大学)

伊藤 詔子 (広島大学)

横田 由理 (広島中央女子短期大学)

木下 卓 (愛媛大学)

ニューズレター編集委員

大神田 丈二

Bruce Allen (順天堂大学)

加藤 貞通 (名古屋大学)

近江 満里子

会誌編集委員

上岡 克己 (高知大学)

山里 勝己 (琉球大学)

リノ訪問記—ニュー・ネイチャーライティング

伊藤 詔子

昨年の夏コンコードでのソロー学会のあと、シアトル経由でリノに寄り、「環境芸術と人文学研究センター」(Center for Environmental Arts and humanities)所長のスコット・スロヴィック教授他、ネバダ大学リノ校のスタッフと会う機会があった。折りからシェラ・ネバダ山麓の景勝地スコー・ヴァレー(1960年冬季オリンピック会場)で7月12日から19日まで開催されていた第27回"Arts of the Wild: Writing with the Natural World"の一部を覗くという好運にも恵まれた。プログラムによると参加主要作家は以下の面々だ—Rick Bass, John Daniel, Alison Deming, Brenda Peterson, Jack Hicks, James Houston, Patterson Rogers, David Lukas Sandra McPherson, Gary Snyder. 内容は朗読や創作ワークショップ、学者や作家や出版社のパネルで豪華な野性芸術祭といった雰囲気だったこの大会見聞もふくめ短い滞在中の印象をお伝えしたい。

先ず第一にリノという町は政治的にも地理的にも、アメリカ社会と文化の多様な対立的要素を含む興味深いところに思える。それに何よりもネイチャーライティング研究のメッカとして、又多くのネイチャーライティングを生み出す根源的要素を内包する場所として独特の魅力を持つリージョン—Great Basin—に属している。ネバダ州はこのGreat Basin、つまりロッキー山脈とシェラ・ネバダ山脈に囲まれた広大な高地の主要部を成す。砂漠地帯の強い風と乾燥した気候で中西部のように〈肥沃な大地〉という訳にはゆかない。アメリカ史でもこの地域は1848年サンフランシスコ郊外での金発見以来金のみならず銀床銅床等豊かな地下資源を求めてマイナー達が押し寄せてくるまでは、歴史の表にたち表れてこなかったといえるかも知れない。しかし反面ここは古代アメリカ先住民アナザシ族の居住地として又国立公園や国定モニュメントのキャニオンがひしめく驚異的景観の地として、アメリカ最後の〈手つかずの自然〉(wilderness)の意味を最も鮮烈に捉え直す場所なのだ。このことと現在ネバダ州だけで16くらいある部族のリザヴェーションの存在は、その険しい地理的条件と密接な関係があることは言をまたない。実際この地形自身が「手なずけられるのを拒んだ」(Refuge: An Unnatural History of Family and Place)自然を残してきたことからStegner, Abbey, Williams, Bass等優れた西部ネイチャーライターを育て、現在も多くのワイルドアートを生み出しているのかも知れない。

彼ら荒野の賛美者たちの共通の想いには、長い間東部社会から "wasteland"とみなされ核実験サイトにもされてきたこの地への愛と共に、あるがままの自然の価値に盲目で軍事的有用性のみ考慮してきた国と、彼らの、搾取の対象としての自然観への強い抵抗の姿勢であろう。リノで発行されている"High Country News"95年4月3日号"The Great Basin"の特集によると、砂漠の生態系を守り開発や汚染から大地の身を守る多くの環境保護活動家の集団がプロジェクトを展開し連帯して"Wildland Project"やSage Bush Alliance等の組織を育て上げてきた。又Great Basin賞賛にかけては右に出るものはいないEarth Firstのリーダー、Dave Foremanはリノ近くの空軍基地にある幼稚園に通った。彼の運動の活力の根源も"Nowhere do we see better classic wilderness than in the Great Basin"という言葉に窺える真の野生としての西部への愛だ。

ところでこのような地史は、リノがラスベガスと並ぶカジノの地でその経済効果が何よりもこの地の都市化を促したこと、又今やラスベガスがディズニールランドを凌ぐ勢いの"family destination"に成長しTime誌も"The New All-American City"と呼んでいることはどう結びつのだろうか。Life誌がかつて"loneliset road in America"と呼んだハイウェイ50を走って東西から人の集うこの新ファミリーランドは新しい〈楽園〉としてアメリカに健全な楽しみを提供するのみならず、5000人から1万人の従業員を要するグランドカジノの林立が、カルフォルニアからの(経済難民)受け入れのキャパシティをますます拡大しているという。私が訪問する前々日カジノを訪れたRick Bassは、スロヴィック教授の話によるとリノのカジノの代表格"Legacy"を見て「こ

これこそ新しいネイチャーライティングの素材だ」と語ったという。というもそこには巨大な搾取機がビルの真中を貫通して据えられ、パワーショベルが機械仕掛でゆっくりと作動し続け、その周囲のフロアに無数といつてよいゲーム機に打ち興じる人々の群れがある。更に天井は太陽と月と星を正確に出現させる人工の空を仰ぐ仕掛から成り、しかもベーターベンの運命が声高に鳴動する正に不思議なワイルドアートと呼べる人工的空間だからだ。石油会社のジオロジスト勤務の経験を経てネイチャーライターに転向した作家ならではの上記の言葉は、マイニングの行為が大地への搾取の自然破壊の行為であるとともに、地底から汲み上げられた富が人間に幸福をもたらす文明のカラクリの象徴的パラダイムであることを痛感している人のものだ。彼のOil Notes(1989)はカフカの言葉"Freeing the frozen sea within us" (我らの内部の凍れる海を解放し)で始まり、「でも僕はオイルがどこにあるか知っているし、それを知ることがどんな感じのことなのか、どうやってそうするのか説明してみたいのだ。ただ知らせるのではなくて見せたいのだ。というもそれは三次元的、いやそれ以上のことだからなのだ。...それは私の内部の凍れる海なのだ。私はどうやってオイルを見つけるか知っている」(p.2, 1989:rev.1995, Southern Methodist Press)と続く。

オイルが現代文明の原資であるように、Great Basinの豊かな地下資源は現代アメリカ文明の原資であった。とりわけこの地方に都市を出現させ、夜中不可思議なネオンの虹を砂漠地帯に架橋する林立するカジノの存在は、ネイチャーと人間の最も厳しい相克の図、否むしろ親密な約束成就の啓示かも知れない。「運命」の鳴り響くカジノの2階のコロニーから人の群れと搾取機と星と月を見上げた私は、当然のようにポーの"The Masque of the Red Death"を想いだした。プロスペロ王は日の光を遮断して虹を分光した七色の部屋を東から西へ配置し、欲望の奔流と化す仮面舞踏会を演出し、一時間毎に宇宙の「運命」を予告する時計に不可思議な感応力を持つ音楽を流した。人工の光彩が虹の分光と違うのは、そこに全ての色彩を生じる白光ではなく全ての色彩を消す黒が仕掛けられていたことだった。病魔を避けてたてこもった筈の殿堂には、滲み出たとしか思えない病魔が内部から侵入(又は滲出)し、決闘の末王が死ぬと共に人々も瞬時に疫病に倒れ、劇場は突如暗転する...

1820年代既に〈自然の死〉を直感し、奇妙なゴシック空間にロマン派の夢を溶解したポーのような作家は、今世紀も80年代になってやっと鮮明な認識を得たネイチャーライティングとは無縁かもしれない。スナイダーをもじれば正にno-nature writerと呼ぶべきだろう。しかし一度でも〈自然の死〉のことを考えないネイチャーライターはいないとすれば、リック・バスがいみじくもカフカに霊感をを得たように、ポーのゴシック空間こそもっとも現代的なネイチャーライティングの空間だという気もする。

ところで再び"High Country News"によると、現在Great Basin最大手のmining company、RTZは、Elyssa Rosenに率えられる環境保護団体"Geat Basin Mine Watch"にwatchされている。彼らはRTZが地下に埋設するパイプラインが地下水脈を破壊し、desert tortoise他貴重な生態系の死を招くことで反対運動を展開している。しかし別の団体"The Nevada Progressive Coalition"は「社会的・経済的・環境的問題をリンクさせることを目指しており、地元の農民や部族の住民、連邦及び州政府が共同してことにあたって」いる。さらに「変化は内部からも外部からも押し寄せているので、かつてのように連邦政府にエンヴァイアロメンタリスト達が身を挺して抵抗するという図式はもう古い。連邦政府そのものがコミュニティーの一員として事に当たろうとしている」と説く(pp.19-20)。ここで言う変化とは勿論ポスト冷戦後の新世界秩序の中でのアメリカの位置という事だろう。つまり核実験は終わりがつたのネバダ核実験反対運動はいまや核のwaste dump(廃棄物投捨場)反対運動に切り替わった。そうした状況の中で地下資源の重要性主張とパイプライン埋設は、むしろ廃棄場にならないための重要かつ最大の戦略となる筈だ。かつて一斉を風靡したMonkey Wrench Gangのモデルの一人、フォアマンも今やかなり老練な環境ロビイストに変身せざるを得ない理由がある。

辛口ネイチャーライティングOil Notesがこの作家固有のビターな文体で"To drive on through those busy oil fields, as in a time machine, where the doomed present does not know its future. To go to a movie, cut the grass, go to sleep with the window open and a breeze blowing in. What you will probably someday look back on with much huger as a time without troubles...(p.134)と書くとき、おそらくネイチャーとは、世界が人間の存在そのものの中に絡めとられている矛盾葛藤愚鈍そのものことだとも言えるだろう。そしてこれはPeter MatthiessenがThe Snow Leopardで引用するヨブ記の一節〈「私が地の基を据えたとき汝はどこにいたか、もし判っているなら答えよ。地の親石を置いた時、朝の星々は共に歌い、神の子らはみな喜びの声をあげた」「私はそこにおりました」これは確かな答えだ。何故なら宇宙がどのように始まったにせよ、私たちが身体と考える束の間の集合体を構築する原子のほとんどは、原始より存在していたのだから〉(Penguin,1987, p.65)で表明されるものだ。Oil Notesはいみじくもこの一節をエピソードに掲げ、「奔放な汚染者達一彼らの大地、私の大地、私たちの大地と接触しない人々によって操られる産業、それは悪い質の危険な当然視で、<自らの利益のために他者を傷つける>(harming-others-for-one's-own-good)もっと悪質な奴だ。月が昇り、白いシーツのシワが見える。明かりが部屋を黄色く照らし9時46分、少しの間読みたければまだ読める...私はこれを決して当然視しない」(p.171)と結んでいる。

ASLE(Association for the study of Literature and Environment)

*****第2回隔年年次大会*****

ASLE(Association for the Study of Literature and Environment)第2回隔年年次大会が、7月17日から19日まで米モンタナ州ミズーラにあるモンタナ大学で開催される。3つのキーノートセッション、15のラウンドテーブルセッション、344の研究発表の他Blackfoot川下り、Rattlesnake溪流散策、Metcalf野生生物保護区見学をふくむ多くの行事が組まれている。モンタナ州に本部をおく環境保護団体Wilderness Watchの共催行事も予定されている。キーノートセッションは、17日が司会Cheryll Glotfelty、講師Thomas J.Lyon, Joseph Meeker, Louise Westling、18日が司会Sean O'Grady、講師David Abram, Shoko Itoh, David Robertson, Gary Snyderによるシンポジウム、19日がRick Bass作品朗読。主要なラウンドテーブルは、"Scholarly Journals, Literary Magazines, and the Environment"(司会 Scott Slovic), "Ecocriticism and the Academic Job Market"(Patrick Murphy), "Nature Writing in the South"(Janisse Ray), "Network by Bioregion-Creating Communities of Environmentalists, Teachers and Writers"(David Robertson)等エコロジカルな文学研究と大学教育制度との関係、研究活動と作家や環境保護運動との連携をテーマとするものが多い。参加申し込み先など詳細はASLEホームページ<http://wsrv.clas.virginia.edu/~dip2n/asle.html>。

環境文学

Environmental Literature

パトリック・マーフィー (Patrick Murphy)

Indiana University of Pennsylvania 英文科教授

ノンフィクションのエッセイを教えるアメリカ文学の教授なら、それが作品として美しいものであり、英文科で教えるのに十分ふさわしいということが証明できなければなりません。新批評派が、アレクサンダー・ポープの韻文エッセイの研究を楽しむのは、その研究を正当化するものが、詩の要素だからだと思います。というのは、新批評は、ノンフィクションを文学研究に含めることに強く反対する種類の文学分析だからです。とはいえ、アメリカの大学における新批評の勝利は、その根本的前提が問題になり始めた10年間にもたらされたといえるでしょう。すでに1940年代には、一群の文学研究者たちがアメリカ文学研究における歴史的、文化的及び政治的方向付けを展開中でした。彼らは、新批評がなし得なかった、アメリカの特性を明らかにするという問題にかかわっていたのです。このような批評家に、ケイジン、スピラー、マティーセンなどがいます。彼らは、1948年に『アメリカ合衆国の文学史』(Literary History of the United States)を著した人々であり、自らを文学史家と定義しました。その後まもなく、アメリカ文化におけるピューリタン時代への関心が高まりました。トム・ライアン(Tom Lyon)が指摘しているように、1948年の『文学史』(Literary History)がネイチャー・エッセイにまったくふれず、その他のタイプのノンフィクションにもほとんど言及していないとすれば、この段階ではまだピューリタン時代の研究者は、いわゆるノンフィクションのたぐいを歴史と文化の見地からとらえて、文学遺産として正当化するに留まっていたといえるでしょう。

1950年代における新批評のおさめた勝利に対抗して、今度は、アメリカ研究が台頭してきました。それは、一方では文学に焦点を合わせながらも、歴史的、文化的、政治的そして経済的な方向性を持つものでした。1960年代に入る頃には、アメリカの大学で新しい意識が芽生え始めてきました。それは、過去10年間における冷戦時代の社会風潮とは全く異質な意識です。当時のアメリカ文化に対する批判的見直し作業の一部として、環境危機に対する懸念が高まってきたのです。何にも増してこの気運が、「自然に関する文学」(The Literature of Nature)、「人間と自然界」(Man and the Natural World)そして「ネイチャー・ライティング」(Nature Writing)と題された一連の英文学科の新科目の開設に結びついたのだと思われます。

これらの科目名の中で使われているライティングという言葉は、明らかにノンフィクションで、そして審美的というよりは、修辭的、主題中心的な題材を文学研究の対象として含んでいくという意向を示しています。トム・ライアンが主張するように、ネイチャーライティング(Nature Writing)という言葉は、教師たちによって「博物史と自然の中の経験」(natural history and experiences in nature)に焦点を合わせたフィクションでない散文のタイプとして定義されてきました。この分野の教師たちの関心は、まず第一に一段と都会化した学生たちに自然や野生に関する知識を分け与えることにありました。さらに、学生たちに今までとは別の文学表現を紹介することに強い意欲を示していたのです。それと同時に彼らは、次の2点のあいだでどうしてもバランスをとっていかねばならないと考えました。すなわち現代性と普遍性の2点です。こうしたことは、ネイチャーライティングを学術分析の対象とするためにはどうしても必要だったのです。

大学の教授や批評家たちはネイチャーライティングについての講義をしたり、出版物を出し始めました。とはいえ彼らはすぐに、「ノンフィクション」(nonfiction)と「経験談」(experience)のテキストのみを対象を限定することは不可能だということが分かったのです。さらに

自分たちが賞賛している作品の美しさを、十分に指摘する事が出来ないということにも気がつきました。このようなことから、ネイチャーライティングについての定義は絶えず変化しながら今日まで至っています。ここでこれまで、曖昧にされたままだった「ネイチャーライティング」(nature writing)と「博物史の作品」(natural history writing)を区別してみようと思います。リンネが1735年に『自然の体系』(Systema Naturae)を出版するまで、科学的分類法に基づいた博物史(natural history)という学問は存在しませんでした。博物史(natural history)が直接個人のフィールドワークに基づいた科学記事という形式を持つに至ったのは18世紀の半ばから終わりにかけてのことにすぎませんでした。それ以降、記述の中からできるだけ主観性や神話、逸話、宗教的信条を取り除こうとする試みが19世紀から20世紀初頭まで続けられました。

私が思うに、19世紀になってはじめて、アメリカでネイチャーライティングが経験を表現する明確な様式として存在しうようになったのです。その様式では、博物史(natural history)や科学的観察の手法が使用され、フィールドワークが拠り所になっています。そしてそのために、個人的、主観的、かつ文学的な表現様式となるのです。ネイチャーライティングが自然科学と区別される唯一の要素は、前者がつねにノンフィクションを重視してきたという点にあるかと思われます。というのも確かに19世紀始めになると、数多くの文学作品が、筋、テーマ、そしてイメージリーにおいて自然と深く関わるようになったからです。この現象は小説と詩の双方にみられる現象でした。そこで、アメリカ文学において次に挙げる二つの分野が台頭してきました。一つは、博物史(natural history)と次第に区分されるようになったノンフィクションの、審美的なネイチャーライティングです。もう一つは、それ以外の、アメリカのフィクションや詩とは、主題、描写、イメージリー、テーマにおいて異なるフィクションの自然科学(nature literature)です。

そういったノンフィクションのネイチャーライティングやフィクションの自然科学(fictional nature literature)が今日においても書かれ続けています。ネイチャーライティングは一つのジャンルですが、ある様式の中に含まれるジャンルです。ここで様式という言葉は、普段、ネイチャーライティングという言葉を使って指し示しているものよりも、もっと幅広い範囲を含みます。その様式こそ、私が自然科学とよびたいものなのです。では、ネイチャーライティングとは記述の際の一つの態度であると定義できないでしょうか。つまり、記述の際に自然界の細かな点まで注意を払い、人間が人間以外の存在とどうか関わっているのかに関心を持ち、自然界全体の中で人間がどの位置にいるのかをイメージリーや哲学的な語りを通じて表すという態度こそ自然科学であると言いたいのです。ノンフィクションの散文では、著者がある絶対的な信念を抱いているという傾向がみられます。具体的にいえば、より多くの情報や著者自身が体験した顕現を作品中に提示すれば、読者の自然や人間についての考え方が深まったり、あるいは変化したりするであろうと著者は確信しているのです。多くの自然科学の作品では、至るところに、その読者に自然賛美の気持ちが広がっていくという信念が見られますし、また、自然のインスピレーションを直感的に受けたという経験は普遍なものだという確信が見受けられます。それとは対照的に、環境文学(environmental literature)は、自然賛美が読者に広まるという点や、直感的な経験の普遍性を前提とはしていませんが、自然科学(nature literature)の特質の別の側面を共有しつつ、生態学的関係や環境危機についてより強く意識してゆくことをその前提としています。ソローの『メインの森』(Main Woods)は、細部を強調し、自然賛美を広めることを目的としているという点から見て、とてもネイチャーライティングの傾向が強いと言えます。一方、『ウォールデン』(Walden)は環境破壊、消費者文化の広がり、そして人間と人間以外のものとの間の親密さの喪失に対するソローの懸念が見えるという点で、より環境文学的といえるのです。自然科学と同様に、環境文学もあらゆるジャンルにまたがっています。ノンフィクションの散文、小説、物語や詩、また複数のジャ

ンルを統合した作品もあります。同時に環境文学は他のジャンルよりも、いっそう現代社会の現象を反映しています。というも過去30年間で、地球規模の環境危機が広く知られるようになったからです。しかし、差し迫った環境危機を意識した作品は、実は19世紀のアメリカ文学にすでに見られているのです。さらにアメリカ以外に目を転じれば、より早い時期の作品にこのような意識を見いだすことができます。

ここで私は、最近出版されたノンフィクションの散文から二つの引用をしたいと思います。その引用が私の主張の裏付けとなってくれるでしょう。最初は、ジャック・ウェナー・ストーム(Jack Wennerstorm)によって書かれた『兵士の喜びの日記』(Soldiers Delight Journal)からのものです。これは、最近のネイチャーライティングの一例です。

「明らかに自然の歴史に重点を置いてはいるが、自然と人間両方の歴史を、私は深く洞察してゆくつもりである。もちろん自然の歴史の方に重点を置いてはいるのだが。私は、魅力的な植物相や動物相において代表的なものを説明することに努めたのであり、決してその地域の種すべてを列挙することを試みたのではない。

野外に出れば、自然の掴みがたさに出会うことだろう。私はそのような掴みがたいものを、しっかりと押さえない。そして、今再び自然の素晴らしさをじっくりと調べて、そこに光を当てたいと望んだのである」(13-14)

二つ目はピート・ダン(Pete Dunne)著の『木霊につつまれて；自然についてのエッセイ』(Before the Echo; Essays on Nature)からで、これは環境ノンフィクション文学(environmental nonfiction literature)の一例です。

「まだら模様の影のごとく、ひどく痛めつけられたかのように見える動物が風景をゆっくりと横切っていた。...

スカンクはアスファルトの道路をゆっくりと歩いていった。目指すのは風にそよぐ木の根もとにあった古巣、今ではボブの車庫がある場所だ...

混乱したスカンクは車の下にもぐり込んだ。車は多少大げさなボブの昇進祝いだった。そしてタイヤの匂いを嗅ぎ、いらいらしたようにどこかに消えてしまった古巣への入口を探し始めた。」(6-7)

この引用の後半では、人間の行為に対する非難がほとんど途切れることなく、叙述的描写に込められています。

まとめると、自然文学(nature literature)という様式も環境文学(environmental literature)という様式も、自然や人間と人間以外の関係について記述する様式でありながら、じつはお互いに異なるのです。どちらの様式も、あらゆるジャンルで実践することができます。従ってネイチャーライティング(nature writing)は、ある様式の中の一つのジャンルであり、一方環境文学(environmental literature)は複数のジャンルを持つ様式なのです。私達の研究領域を決定すべきものは、ジャンルよりもむしろ様式です。また私達は以下のことを認識する必要があります。環境文学(environmental literature)が自然文学(nature literature)に含まれるものであると考えるにせよ、あるいはそれとは逆に、自然文学(nature literature)が環境文学(environmental literature)に含まれるものであると考えるにせよ、いづれにしても教科課程の構成や教授法、そして政治的・倫理的なスタンスにおいて、多様化(ramification)が起こることです。

翻訳担当：相原優子 相原直美 岩政伸治 近江満里子 桑原紀子 平塚博子

ネヴァダ大学リノ校での一年

結城 正美

ネヴァダ大学リノ校英文学研究科「文学と環境」プログラムは、ネイチャーライティングおよびエコクリティシズムに関する全米初の大学院プログラムとして昨夏発足した。教授陣には、アン・ロナルド、シェリル・グロットフェルティ、スコット・スロヴィック、マイケル・ブランチといった優秀なエコ批評家が顔を揃えている。私は昨年8月よりフルブライト奨学生として、10人足らずの大学院生とともに本プログラムで研究している。

この二学期間、環境をめぐる文学に関する授業では、「核の時代におけるアメリカ文学」(スロヴィック)、「アメリカン・ルネサンス」(ブランチ)、「自然をめぐるアメリカ現代詩」(スロヴィック)、「ソロー以前のアメリカン・ネイチャーライティング」(ブランチ)を受講した。いずれの授業も、作品を文学的伝統に位置づける視点を養うとともに、文学作品がわたしたちの日常生活に及ぼす心理的、社会的、政治的影響を検討することを目的としており、現在の状況に対して作家がどのような反応を呈しているか、それがどのように作品にあらわれているか、また文学批評家はそうした作家の(文学的・政治的)姿勢にいかに応ずるべきかという問いを念頭において議論が進められた。議論が結論に達することは稀で、皆の意見が絡み合ったまま時間切れとなる場合がほとんどであったが、白熱した意見交換をとおして、環境をめぐる文学が現代の世界観を考える上でいかに重要な分野であるかという認識をあらたにした。

文学と日常生活との密接な関係をとらえる視角は、スロヴィック教授がディレクターを務めるセンター(Center for Environmental Arts and Humanities)が主催するネイチャーライターによる自作朗読会や公開ディスカッションによっても深まった。この一年間にリ

チャード・ネルソン、ロバート・マイケル・パイル、デイヴィッド・クオメン、ルイズ・ヤング、レイ・ゴンザレス、ジョン・ジャンヴィ・Jr、ゲイリー・ナブハン、アリソン・デミングをはじめとする数多くのネイチャーライターが来校された。いずれの作家も気さくな人柄が印象的であったが、主催者側のもてなし方もまた気さくで、メキシカン・レストランでの5ドル以下の夕食や近郊のピーバイン山へのハイキングには大学院生も奮って参加し、作家たちと打ちとけて話をする機会を得た。また、スロヴィック教授のアメリカ現代詩の授業では、デミングおよびネヴァダ在住の詩人ゲイリー・ショートが実際に学生の議論に加わり、詩作をめぐる見解を披瀝してくれた。

* * *

リノへ来た当初は、言語の違いよりも風景の違いにショックを受けた。カジノ街、核実験場、アメリカ先住民保留地、広大な荒野—ネヴァダを語ることは書物から得てはいたが、はじめて飛行機の窓から目にしたりノの赤褐色の風景は、これまで緑深い山村で暮らしてきた私にはまったく異質なものである。新しいというよりは脅威的な風景であった。砂岩がむき出しになっている山々。一面セージブラッシュに覆われた荒野を貫いてはいるハイウェイ。この土地で暮らすのだという期待よりも、ここに馴染むことができるのだろうかという不安の方がはるかにまさっていた。

ネヴァダの風景と関わりをもつきっかけを与えてくれたのは、文学と環境プログラムの先生方や院生であった。発足して間もないにもかかわらず、文学と環境プログラムはすでにある種のコミュニ

エコクリティシズムの今後を展望する

Thoughts about the Future of Ecocriticism

ローレンス・ビューエル(Lawrence Buell)
ハーヴァード大学英文科教授

【著者による注記—ここに再録したのは、1996年9月20日に立教大学で行った講演の冒頭部分である。講演会は立教大学およびASLE-Japanの後援により実現したもののだが、同時に日本学術振興会研究助成金による滞日の機会があって実現したのもでもある。共同研究者としてお世話いただいた筑波大学助教授今泉容子氏にも感謝申し上げます。】

エコクリティシズム(環境文学研究)は1990年代に入ってから劇的な広がりを見せている。アメリカでは大学の内外を問わず、広く注目を集めている。その広がりや速さには驚くばかりだ。10年前に私が『環境主義的想像力』(The Environmental Imagination)を書くことを思い立った頃、エコクリティシズムはまだ存在していなかった。この本が完成に近づく頃まで、私はエコクリティシズムが文学研究の大きな流れの一つと見なすとは思わなかった。むしろ、文学研究者の興味をあまり引き起こさなそうなトピックを選んでしまったのではないかと心配があった。私がこの本の全体を通してヘンリー・デイヴィッド・ソローに力点を置いたのはこのようなことも一因である。なぜなら、今のところアメリカのネイチャーライターの中で文学的正典(canon)として認められているのはソローのみだからである。個人的なことを言えば、私もソローを大いに評価してきたのであるが、正直なところ本当に強調したかったのはソローではなく、むしろそれ以外のネイチャーライターたちであった。私が文学理論をこの本で強調したのも、少なからず同じような理由からである。たとえば、ミメシスあるいは表象、作家の主体(authorship)、正典、そしてパストラル的言説。これらの理論的問題に力点を置いたのは、予想される反論をできるかぎり押さえておく必要を感じたからであり、また、それまで環境という視点に興味を示さなかった学者たちをなんとかして引きつけたからである。

大変驚くと同時に安心したのは、こういった研究に興味を示す人間が思ったよりも多かったことである。

それでもやはり不安は尽きない。私が案じているのはエコクリティシズムの今後である。エコクリティシズムは、これまでになされてきた研究—私自身のものも含めて—を越えて、その視野を拡げていく必要がある。実のところ、私のこのような批判は、何よりも自己批判のつもりなのだ。これまでのところ、エコクリティシズムは特に二つのテーマ(1)危険にさらされている自然界の保護、(2)自然との共感的関係の再認識—に重点を置いてきた。この二つのテーマは、たしかに有益な目標である。特にアメリカや日本の知識人、政治に携わる人々にとっては重要な点であろう。というのも両国ともかなり産業化が進み、とてつもない割合で世界中の自然資源を消費しているからだ。だがこの二点が、世界中の大多数の人々にとっては、さほど差し迫った環境問題でないことも明らかである。人々が大きく関心を寄せるのは、生活の安全(public health)の基本的な問題、つまり、病気の予防、安全かつ十分な水や食料の供給、貧しい人々たちのための住居、安全な労働環境といったことなのだ。これが特に問題となるのは

ティを形成し、ハイキングやパーティ、ASLEおよびセンターの仕事の手伝い、また夜の授業のあとでのビールなど、機会があるたびに声を掛け合いともに時間を過ごした。授業についていけずに気が滅入っているときに励ましてくれたのも仲間の院生や先生方にほかならない。そうした人々との関係が親密になってゆくに連れ、この土地に親しみを覚えるようになったのだろうと思う。

世界中の都市部に住む人々の場合であり、それにはいうまでもなく人口増加の問題が絡んでいる。

これまでの私の研究では、こういった問題はほとんど取り上げてこなかった。私は都市よりもむしろ地方に目を向け、人間中心主義、つまり環境に対して人間がどれだけ支配的であるか、ということへの批判に力を入れてきた。人間と自然の関係については、環境中心主義的に考えるべきであると主張してきた。文学研究者は自然は人間の産物であるという発想から抜け出せないでいる。その一方的な考え方に対し、基本に立ち返って、人間こそが自然の産物であるという考え方を突きつけていく必要があると強調し続けてきた。私は今でもそういった主張が重要だと信じて疑われないが、同時に今まで自分が限られた視野でしか考えてこなかったことも実感するようになった。環境中心主義は、人間として生きるのに最低限の必要も満たせない人々にとって全く無意味だと認識する必要がある。同じ理由で、エコクリティシズムがそのような基本的な問題に取り組みけないならば、おそらく政治に携わる人間にとっても無意味であろう。言い換えれば、エコクリティシズムは20世紀末の人間の健康や生存の維持に対する当然の要求に目を向けなくてはならない。そうしなければ、エコクリティシズムは小さな影響力しか持たず、ごく少数の自然派グループやクラブの内輪話になってしまうだろう。

私のこのような考え方の妥当性は、アメリカにおける最近の環境保護運動の歴史をちょっと見てみれば明らかであろう。アメリカの環境保護論者がここ10年の間に行ってきた運動を概観すると、いわゆる「環境上の公正」(environmental justice)運動がめざましい進展を遂げてきている。従来の大規模な環境保護団体(シエラ・クラブ、オーデュボン協会、ウィルダネス協会等)の会員が減っていく一方、市民の活動グループの数は急激に増加し、既存の地域社会の内部やその周辺で起こる問題、すなわち、有毒廃棄物、公害、あるいは、原子力発電所を初めとする危険な施設の建設計画に対して行動を起こしている。こういった市民の活動グループは、アメリカ全土に3000を越えている。その多くは、地域に密着して発生してきたものであるが、徐々に全国的な組織を介して、互いに結びつきつつある。これまで主流であった環境保護団体の構成員は、中産階級の白人がほとんどで、しかも男性が中心であった。これに対して、最近のグループでは、労働者階級やマイノリティーといわれる人々がかなりの割合を占め、女性とそのリーダーである場合も少なくない。彼らは、概して、環境保護論者として運動を始めたわけではない。むしろ、自分たちの地域社会の環境を脅かす身近な問題に対処すべく、環境保護運動に乗り出したのである。

つまり、アメリカの環境保護運動は、過去10年から15年の間に著しく多様化した。その原因は、自然を保護することよりも、あらゆる人にとっての生活の安全を最優先したことにある。その意味で重要なのは、「自然保護審議会」(the Nature Conservancy)がアメリカの環境保護組織の一つの主流をなし、最強の地位を占めているという事実である。この組織の第一の使命は、絶滅に瀕している種が棲む地域一帯を保護し調査することで、生物多様性を遺伝学的に利用し、そのことが人間の生命の安全に寄与する可能性を探ることにある。

私はアメリカ以外の環境保護運動についてさほど知っているわけではない。しかし、私の知る限りでは、アメリカについて論じてきたことは、世界的にはもっと当てはまるのではないかと思う。つまり、根本的な人間の健康や生活の維持といった人間中心主義の課題は、原生自然の保護のような環境中心主義の課題に増して差し迫っているよう

緑が最もいきいきとしてみえる5月、ネヴァダの大地を覆うセージブラッシュの緑もみずみずしい。視覚的にというよりは、風に運ばれてくるすがすがしいセージブラッシュの匂いがそう感じさせるのだろう。とくに雨上がりのあとにたちこめるセージブラッシュの匂いは、この乾燥した大地の生命力を認識させてくれる。

に思われるのである。

このような傾向にあって、エコクリティシズムが挑戦しようとしていることは、これらの差し迫った問題により十分に伝える方法を見つけ一方、その最終的な目的としての環境中心主義を見失わないことである。たしかに、環境中心主義と人間中心主義は衝突を起こすかもしれない。たとえば、世界のそこには生存しない魚の種や、川縁に生息する希少な種の植物を減ぼす危険を冒してまで、必要に迫られているダムを建設すべきかという問題が生じたときなどである。しかしどのような状況であれ、環境問題に対する人々の関心が高まっているときは、ほぼ確実に環境中心主義的な方向へ向かうと断言できる。たとえば、1991年に開催された最初のアメリカの有色人種による環境リーダーシップサミットで確認された、「環境上の公正に関する17原則」を考えてみてほしい。その立場を際だって明確に示した宣言は、おそらく、第二条の「公共政策は、人々が相互に尊重し合い、全ての人々の正義を実現することを基本とし、いかなる差別や偏見にもとらわれてはならない」であろう。しかし、その第一条には次のようにある。「(環境上の公正)は、母なる地球、生態の調和、全ての種の相互依存性を不可侵のものとして尊重し、生態が破壊されない権利を保

障する。」

明らかにこれは、「環境上の公正」の目的と、環境中心主義の真義とを統一するというねらいを公にする一つの試みである。

翻訳担当：上田都 成田貴子 松井直子 村井弘 松原郁男 (金沢大学)

【編集部注一立教大学におけるローレンス・ピュエル氏の講演は、この後、エドガー・アラン・ポウなどを題材に公衆衛生と環境問題の接点を強調する内容であった。「環境上の公正」(environmental justice)の問題を文学研究がどのような形で扱うことができるかを示す例証的な話を聞くことができた。いずれにせよ、環境文学の問題域が、人間中心主義から環境中心主義に転移するだけでは困難な課題が待ち受けていることをピュエル氏の今回の講演は示唆している。エコクリティシズムはまた一歩、新しい展開を見せようとしている。なお、この講演会の実現に当たってご尽力下さった方々のお名前を記して謝意を表したい。立教大学英文科のスタッフ、なかでも渡辺信二氏、講演会の司会をされた後藤昭次氏、またさまざまなお世話を下さった今泉容子氏(筑波大学)、秋山健氏(上智大学)、高野一良氏(東京都立大学)、成田雅彦氏(専修大学)、高橋守氏(国際武道大学)。懇親会にはたくさんの方々のご出席下さいました。】

***** 日米環境文学シンポジウム *****

(日時：1996年8月13～17日、会場：ホノルル市 東海大学、参加者：ホスト、招待作家を含め総数53名——日本から21名、アメリカから32名参加。)

ヤシとレイントリーの緑の木陰、ネムに似た赤い花、白いブルメリアの花、飛び回るレッドクレストドカージナルやレッドヴェンテッドブルブル、千本足のタコみたいな木はバンヤントリー、小柄な鳩はゼブラダブ、おやこれはメジロ、あれはムクドリだ、と南国の風景を珍しがっているうちにハワイ到着の12日は暮れ、翌朝から中身のぎっしりつまったシンポジウムが始まった。

8月13日8:00～8:30 朝食、8:00～9:15受付、9:15～9:45 開会の挨拶、9:45～11:30 研究発表(4名)、11:30～12:30 昼食、12:45～2:15 研究発表(4名)、2:30～4:00 翻訳ワークショップ、4:15～5:15 P. Frierson 朗読、5:15～7:00 夕食、7:15～8:45 W.S. Merwin 詩の朗読。翌14日は朝8:45 開始、最後の石牟礼道子の朗読とディスカッションが終わったのは夜10時頃、といった具合である。背の高いホテル群の向こうに盛り上がるワイキキの海の青さ、ゆったりした水平線の拡がりを横目に見ながら、こんなに一生懸命学会や研究会の類に出席したことは覚えがない、小学生のころはどうだったかな、などと思いつつ盛り沢山のスピーチに聞き入った。

内容は、ソロー、蘆花、ミューア、熊楠、パウンド、R. ハス、俳句、熊、火山、J. ロンドン、ハワイ島の近代化・自然破壊史、現代日本人の自然感覚、A. ディラード、素戔鳴尊、アイヌ、ネイティブアメリカン、野田知祐、上西晴治、石牟礼道子、T. T. ウィリアムズ、G. スナイダー、W. ステグナー、W. ベリー、宮沢賢治、開高健、W. キャザー、その他に関する研究。参加した作家も多数で、日本から『苦海浄土』の石牟礼道子、『光』の日野啓三、アメリカから詩人W.S. マーウィーン—静かな朗読が印象的—、ハワイ北部の島々の自然観察を報告するP. フリアソン、ネイティブアメリカンの心を語るL. ホーガン、無垢の自然を描くB. ピーターソン、種の絶滅についてD. クアンメン、日本資本によるボルネオの熱帯雨林と村落の破壊とを話題にしたB. ベヴィス、日系人収容所を扱った小説で有名なJ. ヒューストン。このシンポジウムのタイトルは、ASLE Symposium on Japanese and American Environmental Literature というのであるが、内容が実

に多様でありながら、求心力は失わずまとまりを保ち続けたのは不思議である。恐らく双方の参加者一人一人の研究意欲と善意によるところが大きいのであろう。

もっともアメリカ側の参加者が、日本側の研究者がとりあげる日本の作品にどれだけ関心を抱き、理解してくれたかは、かなり心もとない。アメリカ側に日本研究者はおらず、日本側は多数がアメリカ文学・アメリカ研究者である点、アンバランスではある。しかしながら日米両国の中間地点であり、豊かな自然を残しているハワイにおいてシンポジウムを開催し、時間不足にもかかわらず通訳にも気を配ったことなど、バランスには精いっぱい配慮がなされたことは認めなければならぬ。またそのような配慮の下に環境文学についての国際学会を開催した意義は高く評価できる。何はともあれ、これは世界初の企画だったのであるから。ホストのハワイ大学フランク・スチュワート、MANOA スタッフのシャーリーン・ギルモアとマヒアラニ・ジュドワ、ネヴァダ大学のスコット・スロヴィック、ASLE-J代表・野田研一、ASLE-US会長・マイケル・ブランチ、各氏のお骨折りに感謝すると共に、合同シンポジウムの今後の着実な継続発展を祈りたい。

ちょっと待って、何か忘れていませんか?—え?そうそう、このシンポジウムで楽しかったのは、ハードスケジュールからしばし解放されての遠足だったということをおかねば!水族館とワイキキの散歩、熱帯雨林樹木園、それから朝5:30出発のキラウエア火口ハイキング、いずれも忘れがたい。そして、いずれもハワイアンのマヒアラニさんが案内してくれたんだ。ハワイ語書籍の展示販売もあった。マヒアラニさんは、初日の挨拶をハワイ語でしゃべった他は英語で案内し通訳つきだったので我々に不自由はなかったのであるが、しかしバランスと言うならば、現地のハワイアンのことを忘れてはひどいアンバランスである。私は恥ずかしいことに、分かる言葉は'アロハ'だけ、ハワイ諸島の歴史の知識は、日本人移民と真珠湾攻撃の部分だけという有り様であった。ハワイ諸島、ボルネオ、その他太平洋地域の多くにおいて、日本とアメリカ合衆国は、それぞれに資源の開発者・自然破壊者であり、現地住民圧迫の歴史を持ち、その構造を保ち、しかも今繁栄の中でそれを忘れてきているのだろうか?—そりゃあ、いろいろ失敗もするさ。後で報告できるよう、メモを全部束ねて、そろそろ秋の気配の日本へ帰ろう。皆様お疲れさまでした。

(加藤貞通 名古屋大学)

現代ネイチャーライターの横顔 (5)

ジョン・ダニエル

太田 雅孝

まだあまり世の中に知られていなくて、いま自分が熱い気持ちをもって読んでいる作家のことは、本当は(恋人を独占したいように)誰にも告げたくないのだが、そういう良質の作家をキャンペーンするのも批評家の仕事とすれば、(自分の独占欲を押し殺しながら)ここでジョン・ダニエルを紹介せざるを得ない。

この詩人との出会いは、いまやネイチャーライティングの世界では伝説的な雑誌になった観のある「フォリオa」2号(1993)に紹介されたエッセイ「家路」(生田省悟訳)であった。この号にはウォーレス・ステグナーの「場所の感覚」(結城正美訳)という定着と帰属を促すエッセイも掲載されているが、ダニエルのものはそれとほぼ同じような方向性を示すものであった。

しかし、ぼくがジョン・ダニエルを面白いと感じたのは、そのエッセイによってというより、雑誌「ユリイカ」3月号(1996)に訳した「根を持たぬ生き方」というエッセイを熟読したときだった。ステグナーの文章を批評対象として相当意識した上で、自分のこれまでの立場を改め、定着よりもむしろ根を持たぬ生き方に肩入れする言葉がいきいきと立ち上がっているように思えたからである。最近では、ゲーリー・スナイダーもそうだが、定着志向の立場が勢力を強める傾向がある。そのようなときに、こうして移動の再評価を打ち出すのは勇氣ある姿勢と言えるばかりか、場所の感覚の議論をダイナミックに深める意義もある。こうした態度は、一つの見識として重要なことだと思う。

ダニエルは詩人だが、残念ながら、ぼくのまわりで彼の詩集を持っている人はいない。まだエッセイストとしての文章しか目に留まらない。例えば、スコット・H・スロヴィックとターレル・F・ディクソンの編集したネイチャーライティングのアンソロジーであるBeing in the World(1993)に、ダニエルの経歴紹介の文章とともに二篇のエッセイが収められている(この経歴紹介は、「フォリオa」2号に生田氏が日本語で付しているものの元になったものであろう)。「死に関する省察」はエッセイ集『家

路』(1992)からのもので、蜘蛛の巣にかかった蠅の最後を語りながら、ある生命が別の生命の中へ取り込まれてゆく事実を、進化的な時間の枠の中で見つめたり、甲虫が蟻に襲われているのを助けながら、人間だけがこうした有り様を情緒的に意識しうることから死の恐怖を捉え直している。

「観光の貧困化」では、観光が自然を、〈現存〉するものとしてでなく、人間が見るために見られているようなく景色〉として、単なる視覚的イメージに還元してしまうことを指摘し、同様な美と効用性とを奉る還元の意識が、記念写真やテレビのドキュメンタリーなどに見られることを取り上げ、自然のものそれ自体との原初的な、いわば身体と心が一体となって感じるような、そうした知覚の興奮をかき立てる出会いの意義を探っている。これこそネイチャーライティングの豊かさを味わわせてくれる、すばらしいエッセイだ。

ダニエルのしっかりした言葉には、光るものが多い。たえず自分の体験を踏まえながら語る文章には、細部を冷静に観察し、そこから深い認識にいたる鋭い省察力がある。詩人の言葉遣いらしく、地味ながらも咀嚼すべき豊かな見識が込められ、実に魅力的だ。誠実で毅然とした態度も快いが、ユーモアや皮肉も過不足なく備わっている。彼の魅力に取り憑かれたぼくは、誰にも教えたくない思いと、みんなに知ってもらいたい思いとに引き裂かれているが、このコラムを読まれた方には、やはり一読していただきたいと願っている。

詳しい経歴に関しては、「フォリオa」2号を参照していただくことにして、ここでは簡単に紹介しておく。John Daniel(1948-)は、ワシントンD.C.の郊外で育ち、1960年代後半にリード・カレッジに通うためオレゴンに移住。4学期後に退学し、いろいろな職に就く。87年、ウォレス・ステグナー詩人奨学金を受け、スタンフォード大学に入る。現在はオレゴン州ポートランドに在住。「ウィルダネス」誌の詩欄を編集し、それ以外にも「シエラ」、「ザ・ノース・アメリカン・レビュー」、「オライオン・ネイチャー・クォーターリー」、「ハイ・カントリー・ニューズ」など、文学・環境に関する雑誌に定期的にエッセイを発表している。詩集には、Common Ground(1988)のほかに、出版されたかどうかは未詳だが、All Things Touched by Windがある。文中のエッセイ集『家路』の原題は、Trail Homeである。

○出版情報

- ◎上岡克己『森の生活一簡素な生活・高き想い』(旺文社、1996年) 現在もっとも注目されるソロー研究者である上岡氏(ASLE-Japan会誌編集委員)による2冊目の著書。該博なソロー研究を基盤として、ネイチャーライティングの現在、環境保護意識の問題、そしてライフスタイル変革の問題などを幅広く視野に入れた一個の〈文化論〉として読むことができる。文学と環境の関係を考えるための基本的な問題にゆきとどいた解説が施されている。
- ◎アニー・ディラード、柳沢由美子訳『本を書く』(パピルス、1996年) ディラードがみずからの作家生活、いやものを書くという行為の根源的な不可思議を語った1989年のエッセイ集の邦訳。日本の英文科の卒業論文でディラードが登場し始めていると聞く。これからがますます楽しみな作家だ。
- ◎西成彦『森のゲリラ 宮沢賢治』(岩波書店、1997年) ポーランド文学者による賢治論。宮沢賢治における「植民地主義文学」の本質的分析。たとえば賢治文学における動物物語あるいは動物遭遇譚を植民地的な状況における異文化遭遇譚として読み換え、1920年代日本の政治状況をそこに読みとる。意図されていないにせよ、歴史主義的なパースペクティブを含め、日本のネイチャーライティング研究として

も問題提起に満ちている。

- ◎『アメリカン・ネイチャーライティング選集一森と海辺のいきものたち』(鶴見書店、1997年) スコット・スロヴィック、伊藤詔子、結城正美氏共編著によるアンソロジー。ポーからアリス・ウォーカーまで8編の作品が収められた英語テキスト。英語タイトル(Other Nations: Animals in American Nature Writing)が示すように、動物世界への人間の関心をうまくとらえた優れた作品が選ばれている。随所に織り込まれたコラムも有り難い。
- ◎『場所の感覚—アメリカン・ネイチャーライティング作品集』(研究社、1997年) 野田研一、山里勝己氏共編著によるアンソロジー。メアリー・オースティン、バリー・ロベス、T.T.ウィリアムス、ゲーリー・スナイダーのエッセイを通じて〈場所の感覚〉の問題と実践を考えるための英語テキスト。
- ◎川村湊「風を読む 水に書く1 潮の橋の上で一石牟礼道子論」(『群像』1996年6月号) 石牟礼論として新しい地帯を拓く可能性を予感させる評論の連載が始まった。「言語的反乱」としてとらえられる『苦海浄土』は私たちにこの作品の読み直しを迫るものだろう。

ASLE-Japan, ASLE-U.S.共催 日米環境文学シンポジウム プログラム及びASLE-Japan会員の発表要旨

●プログラム

◆ 8月12日(月)

5:00-6:00 p.m. 事前受付

◆ 8月13日(火)

8:00-8:30 a.m. 朝食(東海大学ないし自由)

8:00-9:15 a.m. 受付

9:15-9:45 a.m. 歓迎挨拶および案内

フランク・スチュワート(ハワイ大学)

シャーリーン・ギルモア(ハワイ大学)

マヘアラニ・デュドイト(ハワイ大学)

スコット・スロヴィック(ネヴァダ大学リノ校)

野田研一(金沢大学、ASLE-Japan/文学・環境学会代表)

マイケル・ブランチ(ネヴァダ大学リノ校、ASLE-U.S./文学・環境学会、会長)

9:45-11:30 a.m. 相互交流一日米環境思想と文学の関係をめぐって

司会:スコット・スロヴィック(ネヴァダ大学リノ校)

上岡克己(高知大学)「徳富蘆花の「みみずのたはごと」

(1913年)とソローの『ウォールデン』

加藤貞通(名古屋大学)「ジョン・ミュアと南方熊楠」

キャロル・キャントレル(コロラド州立大学)「エズラ・パ

ウンドと日本のネイチャーライティング」

アン・フィッシャー＝ワース(ミシシッピ大学)「〈海を見

るとき〉—ロバート・ハス、ロス、俳句」

11:30 a.m.-12:30 p.m. 昼食(東海大学ないし自由)

12:45-2:15 p.m. 自然災害、大いなるカー日本とアメリカの場合

司会:トマス・C. ベイリー(ウェスタンミシガン大学)

横田由里(広島中央女子短期大学)「三つの文化におけるク

マの物語—ヨーロッパ系アメリカ人、アメリカ先住民、

そして日本人」

ジョン・カルデラッソ(コロラド州立大学)「大地の火、魂

の火—火山学者クラフト夫妻、最後の日々」

若松美智子(東京農業大学)、小田島護(ナチュラリスト)

「北海道のヒグマと文学」

ケネス・リヴァース(ラマー大学)「ジャック・ロンドン

The Star Roverにおける挑みかかる環境」

2:15-2:30 p.m. 休憩

2:30-4:00 p.m. 翻訳ワークショップ—翻訳の価値とプロセス

司会進行: アンドレア・ハーマン(アーカンソー大学リト

ルロック校)

4:00-4:15 p.m. 休憩

4:15-5:15 p.m. 朗読会(+スライド)—パメラ・フリヤソン(ハワ

イ、ヴォルケノ)、代表作『燃える島』、ハワイ北西諸島に関する

作品進行中。

紹介 マヘアラニ・デュドイト(ハワイ大学)

5:15-7:00 p.m. 夕食(東海大学ないし自由)

7:15-8:45 p.m. 朗読—W. S. マーウィン(マウイ、ハイク)、詩

人、エッセイスト、翻訳者。代表作『真夜中の太陽』。翻訳に夢

想疎石の詩集(重松宗育と共訳)がある。ピューリッツァー賞(詩

部門)、ペンクラブ翻訳賞を受賞。ワオ・ケレ・オ・プナ熱帯雨

林を地熱開発から守るキャンペーンに積極的に参加している。

紹介 フランク・スチュワート(ハワイ大学)

場所、共同体、女性——石牟礼道子の『苦海浄
土・わが水俣病』を読む

赤嶺 玲子

日本における環境と文学の関わりを考えるうえで、石牟礼道子氏の『苦海浄土・わが水俣病』は、多くの重要な問題を提起する作品である。本書は、ノンフィクションとしてのジャーナリズムの記述形式と、共同体内の相互主観的な語り、つまりストーリーテリングと呼ばれるフィクションの手法を織り混ぜて、産業公害の惨禍を描いたものである。日本の近代化と資本主義の発展の陰で、辺境の村落においては自然環境とそれに深く根ざした人々のくらしが破壊されてきた。水俣病は、そうした破壊が最も凄惨な人体や風景の異形となって現れた例である。

この作品で描かれた水俣病の物語とは、近代化による、ある場所とそこに根をおろした共同体の疎外の物語であるといえる。近代以前の不知火海沿岸の水俣漁村において、海や土地との相互依存の関係性の中で生きてきた人々は、汚染され、崩壊してゆく大地と逃れようもなく運命を共にしてゆく。環境の破壊は、人々がその上に創り上げてきた自然と人間の意識が統一された神話世界の消失をも意味し、人々の存在を根底から脅かすものとなった。

石牟礼氏は、足尾鉍毒事件など他の工業汚染との連続性の中で水俣病をとらえ、日本の近代資本主義が、「体質的に下層階級侮蔑と共同体破壊を深化してきた」と指摘する。中央集権化は辺境の疎外を生み、その土着性を壊してきたといえよう。著者は、水俣の土地が湛えていた調和とその喪失の過程を記録することで、近代文明のひとつの縮図を描き、日本の近代化に対するアンチテーゼを提示している。

石牟礼氏がこうした疎外に対する鋭い洞察を構築するうえで基盤となったものは、女性としての存在であるように思う。本書には、娘を娼婦として売る貧しい村人の古い習慣や、雇主による少女の暴行などの話が挿入されているが、著者は疎外の原型のイメージを、そうした女性の姿の中に見い出しているようである。著者の自伝的な作品の中には、目と精神を病んだ祖母や、娼婦など、この世のあらゆるつながりから追放された女性達の、またそうした人々と深い交わりを結ぶ著者の、ひき裂かれた魂の渇きが描かれている。渡辺京二氏が指摘するように、石牟礼氏が水俣病患者とその家族の苦悩を表現しえたのは、「人と人とのつながりを切り落とされること」の痛みを抱えているという点で、また「ぼんのうや魂の深さ」を強いられてきたという点で、患者達と著者が同族だからだといえる。

著者自身が語るように、水俣病とは「文明と、人間の原存在の意味への問い」である。そして水俣病というひとつの極限的な世界から、人間が環境の中で生きるということの意味を問う本書は、レクイエムであると同時に、未来への書であるといえよう。

* * *

釣らない釣り師——開高 健に見る都市と自然

石幡 直樹

1992年の環境と開発に関する国連会議は、現在の生産と消費の仕方のこれ以上の維持も再現も文明の終末につながると警告を発した。人間の未来は人為と自然の良きバランスの内にしか求め得ない。この人

為と自然にまつわる問題の典型の一つが都市と農村の問題とも言える。自然を完全で自己充足的と捉えて擁護するルソーは、必然的に文明を人間を墮落させるものとして嘆き悲しんだ。人の田園に対する感情は、快適な生活技術の獲得と裏腹に人が失って来たものへの郷愁でもある。かつて高村智恵子は「東京に空がない」と言い、小説家を志して上京した啄木は「ふるさとに入りて先づ心傷むかな/道広くなり/橋もあたらし」と故郷を慕った。R. Williamsの言う「無垢の田園と悪徳の都市」という伝統的な構図は時空を越えて広く見られ、英国ではロマン派の詩人キーツの作品や17世紀の詩人ミルトンの叙事詩『失樂園』にも都会生活を哀しむ描写がある。同じく17世紀英国の随筆家、伝記作家アイザック・ウォルトン(1593-1683)は『釣魚大全——あるいは瞑想に耽る人の気晴らし』を著して無邪気、滑稽、素朴な文体で、楽天命の処世訓と自然に浸る喜びを説いた。ウォルトンの賛美した乳搾りの娘たちは、やがて産業革命によってその姿を消すのだが、『釣魚大全』は現在でも世界中で出版され続け、日本でも川釣りを愛した井伏鱒二や冒険的な釣り旅行を世界中に展開した開高健が愛読した。「彼は釣りを介してひたすら清貧、孤高、素朴、超脱を説いてやまない」と開高はウォルトンの釣りを介しての自然との対話を讃える。「私たちは、毎日、緩慢に腐敗しつつあり、緩慢に自殺しつつある」と現代生活を捉える開高にとって、「風景のなかのしみとしかいいようのない、ひどいありさまだが、一瞬で(私は)輝く虚無となることができる」釣りは、都市の生活に疲れた人間の魂の再生としての意味を持つ。魂の浄化を自然の中に見いだす彼はまた、人間が自然を希求する理由を「過酷、非情、意志なきその優しさ、可憐さ、精妙と茶目に彼は自失する。他のどんな手段によるよりもここでは自失が瞬後に充実となれる」からと説明する。さらに、「自然もさまざまである。……むしろ私は日頃から都市も《自然》の一部——硬化し、角質化した一部だが——と感じている」と開高は述べ、伝統的な都市と田園の対置に素朴な疑問を呈する。万有としての根源的な自然観に立てば、田園と都市との対立概念は都市の出現するルネサンス期からロマン主義時代以降に特に好まれた一つの観点に過ぎない。開高の都市と田園、都市と自然を取って区別しない包括的な自然観には、このような万物としての自然観に加えて、主客未分、主客合一を説いて道徳的精神をもその中に含める東洋的自然観の影響もあるのかも知れない。そこには、一面的なノスタルジアを排除した是々非々の態度の賢明さと、文明の利器を人間の宿命として容認する寛容さを認めることもできよう。それを都市の田園主義、近代の田園主義、そして開高をパートタイムの高貴な野蛮人、あるいは都市のエコロジストと呼べるかも知れない。都市と田園のある意味では危ういバランスの上にしか我々の未来はない。「それがどこまで覚悟できているか、いないか。《感ずる》ことができるか、どうか。」と彼は問い、人間は「魚の棲めないところには人間も棲めないのだという鉄則を忘れて」いると反省する。人間を自然界の一存在と捉える見識を備えた開高は、奥只見・銀山湖で釣り師にフィッシュ・ウォッチングを呼びかけて激減したイワナを復活させたことがある。時には釣りを全うしないことによって「釣らない釣り師」開高健は、全き自然を見いだすのである。

* * *

北海道のヒグマと文学 パート(1)

小田島 護

私はこれまでの57年の人生のおよそ半分を日本の北の島である北海道にある2つの国立公園を中心に、ヒグマの生活を知るための調査研究とヒグマの保護の為に活動をおこなってきました。ですから当然私は文学者ではありません。それでは生物学者なのかと聞かれても、すぐには「イエス」と答えることができないのです。確かにヒグマについての調査研究を始めたばかりのころは、科学的な考え方や方法を

◆ 8月14日(水)

- 8:00-8:30 a.m. 朝食(東海大学ないし自由)
 8:45-10:15 a.m. 19世紀、20世紀のアメリカン・ネイチャーライティングをめぐる理論的諸問題
 司会: パートン・リーヴァイ・セントアーマンド(ブラウン大学)
 スーエレン・キャンベル(コロラド州立大学)「楽園の荒廃と驚異」
 高橋勤(九州大学)「現代日本における〈清貧の思想〉の再登場—ヘンリー・ソローと現代日本のネイチャーライティング」
 リチャード・ハーダック(ハヴァフォード大学)「〈沈黙こそわれらが運命〉—アニー・ディラードとアメリカ超絶主義の性差の政治学」
 10:15-10:30 休憩
 10:30-12:00 日本の文学と思想における自然観
 司会: 野田研一(金沢大学)
 ブルース・アレン(順天堂大学)「『古事記』におけるトリックスターと再生 神話」
 矢口以文(北星学園大学)「上西晴治の短編小説分析—ポウンベと蛙の論争」
 高橋守(国際武道大学)「野田知佑—日本の現代作家の自然観」
 12:00-12:45 p.m. 昼食(東海大学ないし自由)
 1:00-1:45 p.m. 翻訳チーム討議
 2:00-4:30 p.m. ワイキキ水族館見学(帰りの東海大学行きのバスは6:15発)
 4:30-6:45 p.m. 夕食(東海大学ないし自由)
 7:00-8:00 p.m. 朗読会—石牟礼道子(熊本市)、作家、代表作『苦海浄土—わが水俣病』、「椿の海の記」ほか。
 紹介 野田研一(金沢大学)
 8:00-8:15 p.m. 休憩
 8:15-9:45 p.m. 石牟礼道子の世界
 司会: 高橋勤(九州大学)
 赤嶺玲子(神奈川県)「場所、共同体、女性—石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』」
 大上博史(ネヴァダ大学リノ校)「政治的行動としての環境文学—石牟礼道子とテリー・テンバースト・ウィリアムス」
 結城正美(広島大学、ネヴァダ大学リノ校)「石牟礼道子と反環境主義」

◆ 8月15日(木)

- 8:00-8:30 a.m. 朝食(東海大学ないし自由)
 8:45-10:00 a.m. ゲーリー・スナイダーの世界
 司会: アン・フィッシャー=ワース(ミシシッピ大学)
 山里勝己(琉球大学)「移動の文学から場所の文学へ—ゲーリー・スナイダーと場所」
 K. ウェスリー・ベリー(ミシシッピ大学)「タブーを語り、タブーを逃れる—ゲーリー・スナイダーと語る」
 デイヴィッド・ロビンソン(オレゴン州立大学)「原生自然と農の原則—ゲーリー・スナイダー、ウェンデル・ベリー、そして〈野生〉の倫理」
 10:00-10:15 a.m. 休憩
 10:15-11:30 p.m. 朗読会—リンダ・ホーガン(コロラド大学デポール校)、詩人・小説家・ネイチャーライター、最近作『居住地』、『太陽の嵐』。
 プレンダ・ピーターソン(ワシントン州シアトル)、小説家、

ネイチャーライター、代表作『光の河』、『敵になる』、『ダック・アンド・カヴァー』、『水辺に生きる』、『自然とその他の母たち』。

紹介：スコット・スロヴィック（ネヴァダ大学リノ校）

11:30-12:30 p.m. 昼食（東海大学ないし自由）

12:30-1:30 p.m. 翻訳チーム討議

1:45-4:30 p.m. ライオンズ植物園見学

4:45-5:30 p.m. 朗読会—ビル・ビーヴィス（モンタナ大学）、代表作『ボルネオ・ログ』（1995年度西部図書賞ノンフィクション部門受賞）

5:45-7:00 p.m. 夕食（東海大学ないし自由）

7:30-8:30 p.m. 朗読会—デイヴィッド・クオーメン（モンタナ州、ポーズマン）、『アウトサイド・マガジン』誌のナチュラルヒストリー・コラムニスト、最近の代表作『ドードーの歌—島嶼の生物地理学と絶滅の時代』。

紹介 スーエレン・キャンベル（コロラド州立大学）

◆8月16日（金）

8:00-8:30 a.m. 朝食（東海大学ないし自由）

8:45-10:15 a.m. 都市とパストラルの思想—20世紀小説と詩

司会：山里勝己（琉球大学）

岡島成行（読売新聞）「宮沢賢治」

トマス・C・ベイリー（ウェスタン・ミシガン大学）「ウェンデル・ベリーの農場3部作における記憶と回復」

石幡直樹（東北大学）「不完全な釣師—開高健における自然の一部としての文明そして都市」

セアラ・ファリス（ヒューストン大学）「20世紀アメリカのパストラル—『おお開拓者』、『一千エーカー』、『陽気な男たち』」

10:15-10:30 a.m. 休憩

10:30-11:45 a.m. 円卓セッション—ナチュラルヒストリー（博物誌、自然史）と文学

司会進行：フランク・ステュワート（ハワイ大学）

パネリスト：マイケル・ブランチ（ネヴァダ大学リノ校）

ジョン・カルデラッソ（コロラド州立大学）

日野啓三（作家、東京）

加藤貞通（名古屋大学）

西村頼男（阪南大学）

大神田丈二（山梨学院大学）

デイヴィッド・クオーメン（モンタナ州、ポーズマン）

パートン・リーヴァイ・セントアーマンド（ブラウン大学）

11:45-12:30 p.m. 昼食（東海大学ないし自由）

12:45-1:45 p.m. 朗読会—ジェイムス・D. ヒューストン（カリフォルニア大学サンタクルーズ校）、エッセイスト、小説家、代表作『ギグ』、『わが人生の男たち』、『大陸移動』、『マンザナーよ、さらば』（ジャンヌ・ワカツキ・ヒューストンと共著）

紹介 フランク・ステュワート（ハワイ大学）

1:45-2:00 p.m. 休憩

2:00-2:45 p.m. 翻訳ワークショップ—発表および企画討議

司会進行：アンドレア・ハーマン（アーカンソー大学リトルロック校）

3:00-3:15 p.m. 休憩

3:15-4:15 p.m. 朗読会—日野啓三（東京）、小説家、代表作『光』、『聖岩』、『砂丘が動くように』、『夢を走る』、『夢の島』

紹介 大神田丈二（山梨学院大学）

4:15-4:30 p.m. 休憩

4:30-5:45 p.m. 円卓セッション—コミュニケーションの活性化にむけて：定期刊行物、雑誌、ニューズレター、新聞

もって私がヒグマという生き物を理解しようとしたことは事実です。しかしそれから20数年を経た今、ヒグマを含めた自然とそこに生きる生き物たちを理解するには、科学的な思考や方法には自ずと限界があると思うようになりました。自然を理解する上で科学的なものの見方や考え方が一定の役割を果たしてきたことは確かな事実です。しかし、自然をより深く認識し、理解するためには、科学的な思考や方法だけでは決して十分ではなく、科学的な思考や表現方法では自然やそこに暮らす生き物たちの姿を理解し表現することは、およそ不可能ではないかとさえ思えるのです。むしろ自然やそこに暮らす生き物の姿は、感覚的、感情的、情緒的と言われる、非科学的な思考によって初めて認識し、理解し、表現しうるものではないかと考えます。

私にとってとても悲しいことは、未だに日本においてはヒグマは正しく理解し認識されず、ただ恐ろしい獣、凶悪で莽猛ないきものとして、人間に姿を見せると殺されてしまうということです。それは人間の生活にとって都合のよいものだけを容認し、それ以外のものを抹殺してしまうといった人間の生存競争の本能にもとづく行為であると同時に、人間本位の文明の歴史そのものの延長であるのかもしれない。近代に入ってから科学の急速な発達、人間をさらに傲慢にし、その結果として人間中心の誤った自然感を固定させることになってしまったのではないのでしょうか。幸いにも狭い日本にも素晴らしい野生をもったヒグマが棲んでいます。前半で私が長年見てきた大雪山のヒグマの生活についてスライドを使って紹介し、後半で若松が文学に表われたヒグマについて話します。

優れた自然文学は豊かな自然環境を背景として生まれてくるものです。その上でもう一つの条件を加えるならば、その社会や個人が優れた自然観、つまり優れた自然認識を持っていることが必要であると考えられます。ヒグマは豊かな森に暮らす「森の動物」であり、豊かな日本の自然のシンボルとでも言うべき存在なのです。しかし今、日本において、ヒグマの暮らす豊かな自然環境とヒグマそのものが、人間の手によって破壊され、殺され続け、このような状態が続くなら、そう遠くない将来に滅びてしまう危険性を持っています。日本だけでなく、地球上の多くの地域から豊かな森がどんどん姿を消し、そこに生きる生き物たちが滅びていこうとしています。私にはその生き物たちの悲しみや怒りの声絶え間なく聞こえてくるような気がするので、今こそ人間が節度をもって自然との共存の道を真剣に求めることが必要であり、文学を含めたあらゆる人間の活動に、人間の英知と決断と勇気と努力が求められているのではないのでしょうか。

* * *

北海道のヒグマと文学 パート（2）

若松 美智子

「北海道開拓の歴史はヒグマとの戦いの歴史であった」と言われるように、北海道開拓民の側から見たヒグマ像は北海道を舞台とする小説の中に多々描かれている。一方、北海道の先住民としてヒグマと深くかかわって暮らした狩猟民族アイヌは全く異なったヒグマ観をもっていた。その自然観、ヒグマ観はアイヌの口承文芸であるカムイユウカラによって数々語り継がれてきた。イオマンテで送られる仔熊のカムイユウカラの一つは、人間の両親と神である両親をもった仔熊をとおして、人間の国土と神の国との友好的かつ照応的關係を描き出している。人間の食べ物を盗んだり、人を食い殺したりした悪い熊についてもカムイユウカラは語っている。このようにアイヌにとって熊は獲物であると同時に神であり、たとえ人間に害を及ぼしたり、人身被害をもたらしたりしたとしても、そのことで熊を皆殺しにしろという発想は出てくるはずもなく、悪い熊に対して、人間の世界と神の世界の仲立ちをする火の神をとおして談判することで、相互の世界の調整をはかってきた。このような文化に裏うちされたアイヌの狩人は、

自分たちの食料であり獲物であるヒグマが自分の毒矢にかかってくれるべく心正しくあること、そして森の自然と生き物に対する豊かな知識と技をもつことを求められた。それは毒矢や槍によるカムイとの生命を賭した戦いでもあった。これはライフル銃、四輪駆動車、トランシーバーのおかげで簡単に熊狩りができる今日行われているような、動物の命を殺戮する楽しみのため、あるいは人間にとって邪魔な害獣として安易に殺戮し、皆殺しにしようとする現今の人間中心主義の文化に裏うちされたハンティングとは本質的に異なるものである。

北海道開拓の歴史は又、アイヌと野生動物の受難の歴史でもあった。開拓者の側から見た大正4年の熊害史上最大の惨劇とされる、10人の死傷者を出した事件は小説「靉嵐」をはじめ、数多くの作家、ジャーナリスト達によって80年たった今なお、繰り返し紹介され、狂暴なヒグマ像が再生されているが、同じ事件が1949年小説家寒川光太郎によって全く異なった立場から書かれていることはあまり知られていない。幼少年期より身の回りの現実世界と森のかなたにある獣達の世界の二つの世界を豊かに生きる野性の感性をもっていた寒川は、この事件を、野生の王者熊の、おのが野生領土を守る抗議と見る立場にたって原始林の英雄叙事詩、「罷王物語—コタンベツの人食い熊伝」として描き出している。彼のもう一つの異色の小説「サカモイナクと熊物語」は森の正義を体現する二つの生命の宿命的対決を描いている。寒川が失われた時代のアイヌとヒグマの宿命的関係を描いたとすれば、一方、上西晴治は長編小説「十勝平野」の中で、明治初期、和人が彼等の世界を侵食しつつある時代のアイヌとヒグマの共同の運命を描いている。この20年のあいだにヒグマは激減し、今も被害予防の名目で、姿を見せればいつでもどこでも殺されている（昨年150頭）。このような一方的な野生動物の捕殺への怒りと、人間中心思想を問いなおす視点にたって書き又、活動している小田島護の「大雪山ヒグマ物語」は、大雪山のヒグマ親子の14年間にわたる観察記録の一部であると同時に、自然の中に長期間身を置いて野生のヒグマたちとのつきあいの中から確かなものとしてつかんだ野生への賛歌である。人間にとって野生のもつ無限の意味を重視する小田島にとって、数百平米の狭い囲いの中に200頭以上ものヒグマを飼う熊牧場の存在は許し難い野生への冒険に思える。又、現在行政がとろうとしている、アメリカに倣った野生動物の管理（すべての熊に耳札で番号を着けたり、無線発信機を首に着けて行動を監視すること）への疑問へとつながってゆく。管理された野生はもはや野生であることをやめた存在—家畜やペットに限りなく近づいた存在とならざるを得ない。一方、野生の本質とその魅力は管理されないということの内にある。その事がこの管理社会に生きる私たちに与える精神的意味の大きさは計り知れないものがあるのではないだろうか。自然を利用し尽くすことをやめ、野生動物が野生のまま存在し続けられる場を残す、いわば聖域としての自然を残す人間の側の謙虚さと反省が今求められているのではないか。人間の自然利用の立場から野生動物を管理したり、その為の科学的研究対象としてヒグマを遊ぶかのような視点とは異なった、文学者の側からの視点が今、求められているのではないか。

* * *

ジョン・ミューアと南方熊楠

加藤 貞通

日本のナチュラリスト、南方熊楠（1867～1941）が神社の森の破壊に抗議すべく書いた手紙「南方二書」は、興味深い——特にジョン・ミューア（1838～1914）の原生自然保全運動と比較して読むと一層である。両者の間に直接的影響関係は発見できないが、H・D・ソローとのつながりはある。熊楠は、「12世紀の日本のソロー」と題し『方丈記』を英訳している。ソローと鴨長明のアナロジーは納得のいくものではないが、ミューアと熊楠のアナロジーは、はっきりして

司会進行：マイケル・ブランチ（ネヴァダ大学リノ校）
『ISLE—文学・環境の学際研究』編集委員（書評担当）
パネリスト：
シャーリーン・ギルモア（ハワイ大学）『マノア—太平洋地域文学』誌編集委員
ジェイムス・ヒューストン（カリフォルニア大学サンタクルーズ校）作家
岡島成行（読賣新聞）解説部次長
大神田丈二（山梨学院大学）『ASLE-Japanニューズレター』編集主幹
デイヴィッド・クオーメン（モンタナ州ボーズマン）作家
スコット・スロヴィック（ネヴァダ大学リノ校）『ISLE—文学・環境の学際研究』編集主幹（『アメリカン・ネイチャーライティング・ニューズレター』前編集委員）
フランク・スチュワート（ハワイ大学）『マノア—太平洋地域文学』誌編集主幹

5:45-6:30 p.m. 休憩

6:30-9:30 p.m. 懇親会 会場：ハワイ大学イーストウエスト・センター（バス出発6:15アラモアナ・ホテル前、6:30東海大学）

◆8月17日（土）

ヴォルケーノ（火山）国立公園見学（全日）

◆8月18日（日）

8:00-8:30 a.m. 朝食（東海大学）後、解散

from editorial staff

■ASLE-Japan／文学・環境学会ニューズレター第5号をお届けします。予定よりも半年以上も発行が送れましたことを申し訳なく思っております。事務局の移転という予期せぬ出来事が起こったこともありますが、何にせよ、責任を充分に果たせなかったことに変わりありません。早くから記事を投稿して頂いていた会員の方々もですが、ASLE-Japanの動向を知りたくてヤキモキになっていた会員諸氏には真に申し訳ないことをしました。■昨年1996年8月のハワイに於けるASLE-JapanとASLE-US共催の日米環境文学シンポジウムの成功、10月の札幌大学に於ける第2回全国大会の盛況と続き、今年度はさすがのASLE-Japanの破竹の勢いも一段落するかに見えたが、今年度も7月のゲーリー・スナイダーの来日講演、モンタナ大学で行われるASLE-US第2回隔年次大会への我等が会員の参画、10月の第3回全国大会と勢いは止まらず、さらには第2回全国大会の折に野田代表から今後は活動を出版事業に移して行くという活動方針の発表もありましたが、いくつかの出版プロジェクトも予定されているようです。それらへの会員諸氏の積極的な参加を期待しています。■第5号は20ページの分量の記事を16ページに納めるためにフォントのポイントを落としましたし、予定していたグラフィックは一つも貼付することができませんでした。紙面はなるべく読みやすいように配慮したつもりですが、ご意見をお聞かせ下さい。また皆さんの情報があって初めて成り立つニューズレターです。ネイチャーライティングに関するエッセイ、書評、シラバス、ご意見ご感想をお寄せ下さい。なお、E-Mailのアドレスをお持ちの方はASLE-Japanのメーリングリストにも参加できます。情報交換の場としてご利用下さい。事務局へお問い合わせ下さい。（J）

いて示唆に富んでいる。少なくとも自然保護の歴史上、日本における熊楠はアメリカにおけるミュアに相当する。

特に両者の違いを一つ、共通点の一つ指摘しておきたい。違い：自然の中の人間の位置づけに対する態度の違い。共通点：両者共に根本的にノーマディック（遊牧的）で、それが野生の森の中に生きている世界モデルを探求することにつながっている。（F・ガタリの「横断性 transversalite」参照。）

1909年、熊楠は神社合祀に反対し森林を守る運動を起こした——これはミュアがヘッチ・ヘッチダム建設に反対し原生自然を守ろうと運動していた時期である。熊楠の神社合祀反対運動は、市制町村制——数個の村を合併し能率的行政組織構築を図る明治政府の近代化政策の一つ、および、神社合祀令——一つの町村に一つの神社を置くものと定め、同時に神社のヒエラルキーを確立し、精神、道徳面での近代化を図る政策——これら二つの近代化政策が関わっている。起源においてアニミスティックで自然崇拜的な日本の神社は、森林に囲まれており、神社の合併は必然的に森林伐採、売却に関わる自然と人心の荒廃を招いた。熊楠がこの運動に懸念になったわけは、一つには熊野の森が、彼の長年にわたる植物と粘菌採集のフィールドだったからである。当時の手紙から、熊楠は、日本にエコロジーの考えを紹介しかつそれに基づいて実践した最初の人であった事が分かる。

熊楠の研究のかんりの部分は粘菌の研究に、またミュアの研究の相当部分は水河の研究に向けられた。ミュアは、ヨセミテの山塊と動植物相が太古以来の水河の活動と共に生成発展している様に、深く感じ入り、汎神論的な宇宙モデルの洞察を得るに至った。熊楠も、植物と動物双方の性質を合わせ持ち、生成発展して止むことのない粘菌に密教的宇宙モデルを読みとっていた。両者の神秘主義的宇宙モデルの洞察は、グレゴリー・ベイトソンの「精神のエコロジー」を参照すると理解しやすくなるように思われる。

ミュアの自然エッセイの魅力の一つは、彼の文章の自己消去性というべき特性にあるが、これはアメリカのエコロジーと原生自然の考え方の問題点、すなわち自然の風景の中に人間をどう位置づけるかという問題点につながっている。原生自然の中では人間は邪魔者にすぎないのだろうか。反対に、熊楠の文章には自己顕示的な特性がある。彼は自己をユーモラスに顕示するばかりでなく、土地の自然と密接に結びついた人々の暮らし方も強調する。

熊楠は「神社合併反対意見」として八項目をかけた。自然破壊それ自体に抗議する第八番目の生物学・地理学的観点を除き、最初の7つは、いずれも住民の生活様式に係わる反対理由である——これらの観点は一括して「社会のエコロジー」と見なせる。その内容は神社の森林と人々の暮らしの密接さについての「環境民俗学」と呼ぶべきものである。（ミュアの原生自然の思想は、残念なことに「環境民俗学」の観点を欠いている。）仏教的・アニミスティックな伝統文化がほとんど忘れられ、また行政権が過度に中央集権化する一方、産業社会が森林・川・海にますます重い負荷をかけつつある今日の工業化された日本にとって、ミュアと熊楠の多層のエコロジーの考えは大きな示唆を秘めている。

* * *

パストラルの諸問題：『みみずのたはこと』論

上岡 克己

徳富蘆花の有名な自然エッセイ集『自然と人生』（1900）と比較して『みみずのたはこと』（1913）は、著者の田園生活の伝記的色彩が強く、現代からすれば幾分古風な感じがするが、おりしもネイチャーライティング隆盛に伴い、パストラルの根源的問題を扱ったこの作品を論じる価値は十分にあると思われる。

蘆花が移り住んだ粕谷の地は、東京郊外の田園地帯にあった。粕谷は都市と野生的自然の中間に位置していた。このパストラルという中

間地点こそ、文明と自然の両方を享受することが可能な理想的な場である。しかし同時に中間地点には、その性格上文明の巨大な力に呑み込まれる危険性も存在する。蘆花は「東京が攻め寄せてくる」と語って、懸念を表明する。パストラルの地とはいえ、すべての問題が解決されるわけではなく、蘆花は高まる自我と環境との軋轢の下、それらの調和を維持する努力を怠るわけにはいかなかった。つまり、蘆花やソローの場合、パストラルを続けていく上で重要なのは、身の周りの産業文明という現実よりも、精神の不可避的停滞（精神のマンネリズム）にどう対応するかということであった。ソローは『ウォールデン』の中でそれを「精神の轍」と呼んだ。彼は『ウォールデン』中幾度となく「覚醒」について言及するが、『ウォールデン』はまさしく精神的に目覚める人間にメタモルフォーゼする作品なのである。その一つに、「日々新」という『大学』の一節が引用されている。この警句が『みみずのたはこと』にも引用されていることからして、両者がパストラルの生活を続行する上で「覚醒」を肝要だと考えている。

農業や自然観については、蘆花は人間性を陶冶する上で農業を高く評価し、自らも「美的百姓」を実践する。彼はキリスト教徒だったが、人間を特別な創造物とみなし、自然の征服を黙認するキリスト教思想は受入れなかった。彼の自然観は、「生命は共通」という表現からして、万物の循環と相互依存を認める、エコロジカルな宗教、仏教の自然観に基づいている。

確かに蘆花は、人間のもつ貪欲さを政治や経済の面から厳しく批判することはなかったし、彼の限界は明白である。しかし日本のパストラル文学上重要な役割を果たしている。というのは、蘆花は伝統的な日本の自然観である花鳥風月の耽美の世界を越え、いわば生命中心主義の自然観を表明したからである。最終的にこの作品の意義は、簡素な生活の喜び、自己を完全にする方法としてのパストラル、生態学的良心の反映としての自然観に要約される。

* * *

野田知祐の自然観

高橋 守

戦後の日本経済の発展と国土の開発はその裏側に環境破壊の問題を常に抱えてきました。40年代後半から50年代にかけての日本は、戦争により崩壊した経済の立て直しの時期にありましたが、経済活動を優先させる政府のもとで各地で公害が始まった時期でもあります。野田知祐の少年時代がちょうどこのころですが、親は忙しく働いてばかりいて子供は外で遊んでいた時代でした。まだ日本には自然が多く残されていました。60年代の日本は経済的な発展とともに物質的な豊かさを求める傾向を強めて行きます。野田知祐が大学生のころには、東京の川はドロ同然でした。このころには産業廃棄物のみならず家庭から排出されるゴミによって日本の川は汚染のピークを迎えます。60年代には本来家族のために家を獲得しようとして懸命に働いてきた日本人が、目的と手段が転倒して、仕事に没頭するようになりました。70年代に入り、経済重視から精神的な充実へと人々の関心が次第に移って行きました。このころ自然指向の家族にニューファミリーという言葉も使われました。一方、「日本列島改造論」を唱えていた田中角栄が首相になります。このころの野田知祐はカヌーイスト・ライターとして自分の行く道を歩み始めたころです。80年代から現在まで日本は経済大国となりました。80年代からの野田知祐は、精力的に作品を書き続けています。彼の作品は、自然の価値に気付く自然を指向する日本人に幅広く受け入れられています。

青年のころ野田さんは、カヌーによる川下り旅行をヨーロッパで初めて見ました。彼のヨーロッパ旅行は、青年の自己同一性発見のための旅であり彼は、最初は自然界と人間界とを分離して認識してはいませんでした。ところが実際に日本の河で「カヌー遊び」を始めてみると現実として自然破壊、環境汚染の問題に直面しました。そしてはじ

めて自然界と人間界との関係を認識するにいたります。つまり彼の思想の流れの中では、自然界とは、はじめは人間界と未分化なままそこに存在していただけでしたが、環境問題に直面することを通して改めて人間界とは異なる世界として認識されたといえます。

* * *

「パウンペと鮭の口合戦」

矢口 以文

上西晴治のこの作品は子ども向けの絵本であり、貝原浩が絵を描いている。その中心は題からも想像されるように、アイヌの少年パウンペと鮭の代表のチャランケ(口合戦)である。ある時、パウンペは友達とコタンの近くの川で鮭をとろうとしたが、さっぱりとれない。それを見ていた村の守り神のフクロウが鮭の代表とチャランケをするようにうながす。

アイヌには古くからチャランケの習慣があった。人と人が行なうチャランケと、人とカムイが行なうカムイコチャランケがあった。人と鮭の代表とが行なうものはカムイコチャランケに類するだろう。

カムイは日本語では神となるが、人間世界の上方に住んでいると信じられている。カムイには人間を守らなければいけない義務があり、人間には守ってもらう権利があると言われている。カムイにはお礼を受ける権利があり、人間にはお礼をする義務がある。従って、カムイは人間を助けるために村を訪れる。または食料になるものを送る。

例えば山のカムイなら熊の姿を取り、肉を運んでくる。人間の側は大歓迎をし、感謝をもってそれを受け取り、みやげを与えて本国に帰ってもらう。鮭の場合は少し様子が違って、魚のカムイが魚を人間世界に送るのである。人間の側は儀式を行なって感謝しなければならない。必要なだけとり、粗末にせず食べなければならない。他の動物たちにも分かち合わなければいけない。粗末に食べられると魚たちは天上の世界に帰ることができない。

人間がカムイに感謝の態度を取り続ける限り、神の側は人間を守り続けなければならない。もしどちらかがこのきまりを破ると、裁きが行なわれ、重大な結果がもたらされることになる。

さて、パウンペと鮭の代表とのチャランケも、そここのところを問題にする。パウンペは「魚国の神様たちはがんごすぎます。ひもじいぼくたちのことは少しも考えてはくれません。魚の入った袋の口をほんの少し開いてくればばいいのに、このごろはますます強く袋の口を締めあげています」と言う。

これに対して鮭の代表は「魚国の神様が怒るのはもっともなことです。長い間、大漁がつづいているうちに、人間たちは食べ物の有難さをすっかり忘れてしまいました。どこの家へ行っても、食べ残しや散らかしたごんがいがゴミ捨て場にもりあがっています」と切り返す。

このように両者のやりとりがしばらく続くのだが、最後にパウンペは自分たち人間の非を認めざるを得ない。裁判官でもあるフクロウフクロウは正式に鮭の勝利を宣言する。

上西晴治はこの物語で、人間の側の「粗末に食いちらかす」ことを問題にしている。人間が自分の欲望のおもむくままに食物を浪費すると、必ず自然が破壊されると暗示している。ここでは人間の取りすぎのため、食いちらかしのため、鮭がなくなり、人間も動物も困り、森のバランスが崩れることが問題にされている。

しかし歴史的に見ると、その問題の張本人は日本人である。日本人の北海道開拓のために、森や川はやせ細ってしまった。そしてパウンペはこの日本人をも代表して「決して、食いちらかさないうちゅう約束するよ」と言う。

パウンペは子どもではあるが、チャランケの時、シャーマンの服装をする。シャーマンは村の幸せをつかさどる。カムイとチャランケすることで、人間のために執り成しを行なったのである。彼は絶望しない。

人間が悔い改め、カムイに感謝をし、食いちらかさないようにすれば、森に豊かさが取り戻されると信じるからである。希望を暗示して終わっている。

* * *

石牟礼道子と反環境主義

結城 正美

本報告の目的は、石牟礼道子が『苦海浄土』や「乳の潮」などにおいて提起している人間と環境とのかかわりの在り方を、〈反環境主義〉という観点から捉え返す点にある。脱人間中心主義を標榜する環境主義には、地域と環境とのかかわりを理解する視角を否定しかねない危険があるとの指摘がある(鬼頭秀一『自然保護を問いなおす』)。イズムとしての環境主義の危険性を看取し、土地とそこに暮らす人たちとの直接的関係性に主眼をおく態度を、本報告では〈反環境主義〉と定義する(環境主義/反環境主義を定義する際の概念的枠組みとして、「牧歌と反牧歌」においてレイモンド・ウィリアムズが提示した図式を基盤としたことをお断りしておく)。

1969年に刊行された『苦海浄土』は、反公害運動の進展と相俟って公害企業告発の書と称され、付随的に石牟礼も環境イデオログとみなされてきた観があるが、彼女は根本的に水俣病を病気ではなく「魂の剥奪」として認識している。この作家の姿勢は、たとえば、「不知火海海域は、文明がその炬を越えるまでは、海辺の霧と光に覆われた風土の神秘が、同時に歴史の普遍でもあるような一地方であった。今その覆いはおぞましい出来事、すなわち水俣病によってはぎとられ、一見平面そのものであるこちら一帯は、読み解かねばならない象となって横たわっている」(「乳の潮」)という一節に明らかである。石牟礼が読み解こうとしているのは、水俣の人々ないし昔ながらの村落共同体にほかならない。人にも山川草木にも同じように煩惱をかける彼らの声は、幾重もの見えざる関係性を纏い、「風土の肉声」(『不知火ひかり風』)と化している。石牟礼にとって、人を読むことは自然を読むこと、また水俣病事件ないし近代化によって葬り去られてしまった場所と人との関係性を読み取ることだと言える。

こうした「風土の肉声」を語る水俣漁民の対極に、石牟礼は組織を位置づける。水俣病事件発生以来、多くのデモや運動が組織され、特にスローガンというかたちで「近代的なマスメディアのことは」が語られてきたが、それは何が学びとられるべき感性なのか忘れ去られたうえでの政治闘争の戦略にすぎなかった。「(水俣の)人々は己の内面を言語化する時、近代的なマスメディアのことはとらない。おくれた田舎の年寄りたちの、保守的ともとれる咬きの表現をとってそれはあらわれる。若い世代と旧世代との断絶という風に、つねにたやすくそここのところが切って捨てられる。あるいは知識層と非知識層のそれという題目が立てられることがあるにしても、知を名乗る側は、己の出自が、もと大地に根ざす種であったという感性を失っていて、根の消失から出発しているという自覚がない」(「乳の潮」)。

「根の消失から出発している自覚がない」とは、イズムとしての環境主義ないし「地球にやさしい環境論」(「天湖——第五章」)にも向けられている批判であるかも知れない。逆に言えば、今日、自然ないし環境を語る場合、「根の消失から出発しているという自覚」は避けられないものである。もはや統一された世界像を結ぶことができない今日、自然を読み解くことが自分自身の空虚を顕在化させ、同時にそれを埋め充填することであるような石牟礼の手法は、自然を語ることをめぐる新たな方向性ないし可能性を提示しているように思われる。

熊をめぐる物語—アングロ・アメリカ、ネイティブ・アメリカ、日本における物語を比較して

横田 由理

動物を主な登場人物とする物語は三つの文化圏において古来から神話、伝説を始め様々な形で存在し、それぞれの文化の持つ自然観を反映してきた。動物物語の主要な領域を占めるものに変身があるが、カイオワ族の神話に基づく、その現代版としてのN. Scott MomadayのThe Ancient Childは変身を通して主人公Setと熊との〈同一性〉を指摘し、又、最後にDevil's Towerという<landscape>に融合していくSetを描き、熊とその物語を産んだ<場所>と人間と関係を明らかにする事によってNative Americanの自然観を提示している。

人と動物を〈同じもの〉とみるこのNative Americanの自然観と酷似するのが、熊を「熊の毛皮を着た人間」として「イオマンテ」（熊送り）でその魂を送るの儀式を行うアイヌの文化である。このアイヌと同じく北方狩猟採集文化圏に所属していた日本の北方土着文化のアニミスティックな側面にも同様の動物観が見受けられるが、その

文化を継承するものに東北地方を中心とする「マタギ」と呼ばれる狩猟民の社会がある。宮沢賢治の「なめとこ山の熊」にはマタギの十郎と熊達とのユートピア的な親和関係の中に既に潜む人と動物との共存を危うくする要因が提示されている。又、志茂田景樹の「黄色い牙」は大正から昭和初期にかけてのマタギの社会を忠実に描く事で、日本における〈近代化〉がいかに土着の文化を侵害し、人と自然との関係を変容させて行ったかを例証している。

フォークナーの「熊」はOld Benの死に至って終焉を迎えた不滅の荒野の精神を描き、「南部の罪」、すなわち、人と自然に対して行われ続けたく、搾取を糾弾した作品であるが、フォークナーが奇しくも大熊Benの最後を銃による死ではなく、その咽に噛みつく犬とナイフを手にした人間と死にゆく大熊が一体となって倒れる姿として描いてように、渾然一体となって滅んで行く（あるいは共存して行く）人間と自然とのcrucialな関係を示唆した作品であるとも言えよう。

熊物語で共通して示された熊の持つ荒々しい凶暴性と暖かな癒しの力は自然の持つ両面性を象徴しており、その自然の一部としての我々人間の自然の中での適切な在り方をこれらの物語は教示しているのではないだろうか。

1996年、札幌で行なわれたASLE-Japanの大会には支笏湖方面へのオプション一泊旅行も含まれていました。日本のアカデミズムの伝統を打ち破るこの歴史的行事において、ネイチャーライティングの研究者たちは大自然の懐で大いに楽しみました。このような活動をもっと真面目にアカデミズムを追及している我々が同志におおっぴらにいうことは賢明ではないと言われる諸兄のお気持ちも分からぬではありません。しかし、私は自信を持って我々が新しく始めたこの伝統（これを伝統と呼ぶずして何と呼べばよいでしょう）がすばらしい成功を収めたこと、また今後も引き続きASLE-Japanの大会で行なわれるべきだと、自信をもってここに報告させていただきます。

10月7日、日曜日、スピーチやレポート作りなど真面目でアカデミックな義務を果たし終えたのち、恐れを知らない我々12人のメンバーは2台のバンに乗り込みました——そのバンの屋根には我々の仲間である小田島氏と若松氏が自らの手で作られたインディアンカヌーが載っていましたが、それはあたかも原始社会からの祝福を運んでいるかのようでした。私たちはそれから野生のアイヌの国へと向かって行きました。遠くに活火山を見ながら、そびえ立つ崖を通り過ぎ、ついに支笏湖のカルデラへとバンは下りていきました。

丸駒温泉へ着くなり、すぐにアカデミックな服を脱ぎ捨て、もっと快適な浴衣へ着替えました。が、それからすぐ、またまたスッポンボンになりました。私たちは湖の側の湯気が立ちこめる露天風呂の中へと入って行きました。この行事を楽しんだ我々ASLEの代表および役員の方々のすばらしい肉体美をカラー写真にしてご紹介しようと企画したのですが、何と不思議なことに、そ

ASLE-Japanの支笏湖へのエクスカーションブルース・アレ

こで撮った写真はすべてダメになったのです。湖の怪人の仕業でしょうか。夕食は北海道の珍味に彩られ、日本酒の方もかなりすみ、みなさんほろよくでき上がりました。

翌日カヌーを持って湖のほとりに向かいました。ライフジャケットを着用し、続けて支笏湖の深く、透き通った水の中へと入って行きました。我々の大切なメンバーを一人も失うことなくカヌーは上手に操縦されていきました。その次に我々は近くの苔の洞門へ探検に行きました。それは、北海道にあるグランドキャニオンの子供版みたいなものでした。ここで文明社会で仕事が残っている半分のメンバーと別れることになりました。残されたエネルギーあふれるメンバーたちは次々に樽前山の途中まで登りました。そこで私たちは北海道の紅葉と雄大な風景を満喫しました。昼食をすませ、再びカヌーの人となった私たちは千歳川をおよそ10キロ下りました。白しぶきが上がるエキスパート用のコースではありませんでしたが、流れはかなり早く我々初心者にとっては十分興奮する川下りとなりました。そうこうしている間に、私たちは早くも風光明媚なところへとやって来て、川に戻る鮭たちが時折空中に飛び上がるのを見て楽しみました。夕焼けとともに本州に戻る我々が文明社会で待ち受ける仕事に間に合うように、カヌーは目的地へとつきました。

一つだけ残念なことは、この旅行に多くのメンバーが参加できなかったことです。授業の関係上早めに帰らなければならなかったみなさんと一緒にできなかったのは残念です。この初めての試みがもたらした楽しさから考えると、これからもこの伝統が続き、我々の多くのメンバーと共に自然のなかで過ごす時間を作っていくことができますように、心から望んでいます。

◎報告：日米環境文学シンポジウム

昨年8月13日から17日までの5日間の日程で「日米環境文学シンポジウム」(ASLE Symposium on Japanese and American Environmental Literature)が開催されました。これはASLE-JapanとASLE-USの共同開催による初めての国際会議。参加者は日米双方併せて約60名。運営にはハワイ大学の文芸誌『マノア』（編集主幹フランク・スチュアート氏）の編集スタッフが当たり、宿舎や通訳の手配からさまざまなアウトドア企画まできめ細かなサービスを提供してくれました。

ネイチャーライティングあるいは環境文学の問題を国を越えて話し合おうというこの企画は、すでに数年前から日米双方のASLEによって提案されていました。そして1995年夏のコロラドにおけるASLE-US

Sの大会で、会長スコット・スロヴィック氏（当時）によってその開催が公に宣言され、以降1年ほどの準備期間を経て開催にこぎつけた次第です。

5日間、午前9時ごろから夜は8時過ぎまで、ほとんど休みなく研究発表、シンポジウム、朗読会、翻訳ワークショップ、円卓セッションが続き、その間の昼食や夕食、あるいは見学会の折りなどにも熱心な意見交換や交流が行われていました。全体としては少人数の上、現役作家・詩人も加わったこのシンポジウムは熱気を冷ます暇もないほど密度の高いものでした。

作家・詩人による朗読会は盛況そのものでした。W. S. マーウィ

ン氏、リンダ・ホーガン氏を初めてするアメリカ側からの招待作家たちはいまをときめく環境文学の旗手ばかり。そして日本側からは日野啓三氏と石牟礼道子氏。まったくタイプを異にする二人の日本の作家が環境と文学という問題を接点に合流するという希有な瞬間に立ち会うことができました。

楽園のリゾート、ワイキキ・ビーチのすぐそばに滞在しながら、ハワイ東海大学のビルに閉じこもることの多い5日間ではありましたが、環境文学をめぐるさまざまなインターフェイスに刺激を受けた5日間でもありました。ASLE-Japanの今後の活動を含め、あらゆる面で大きな一石が投げられた試みであったと評価することができます。とくにASLE-Japanからの参加者の方々が、日本のネイチャーライティングに関するそれぞれの研究を発表されたことは画期的ともいべき意義があると思います。

このシンポジウムに対して快く参加を了承して下さいました日野啓三氏、石牟礼道子氏に心よりお礼を申し上げます。お二人の朗読と講演に何よりも日本文学の力を感じました。研究発表やシンポジウムに心血を注いで下さったASLE-Japanのメンバーの方々には、その努力と素晴らしい成果に心よりの敬意を表します。また裏方として日野氏、石牟礼氏の朗読会のために、素晴らしい英訳を短期間のうちに成し遂げて下さったBruce Allen氏、赤嶺玲子氏に最大級の謝意を表したいと思います。このシンポジウムの運営に当たってはトヨタ自動車の積極的なご支援を賜りましたことも併せてご報告し、改めて謝意を表します。その他、参加の如何にかかわらずさまざまなASLE-Japanメンバーの方々のご支援がありました。有り難うございました。

◎報告：第3回総会・第2回全国大会

待望の第2回全国大会が10月6日～7日の2日間の日程で開催されました。会場はアメリカ文学学会全国大会の開催校である札幌大学。今回は会場を2室に分け、研究発表室と書籍展示室としました。

第1日目は気鋭の作家久間十義氏による「自然と文学」と題する講演会から始まりました。日本近代文学の自然観は「土建屋」(developer)の自然観であるといういささか物騒な話から、ルソーとソローの類似性の考察まで現代日本という現場にある作家ならではの挑発に満ちた講演でした。

2日目は早朝の総会ののち、シンポジウム「動物はどのように表現されるか——人間と動物の世界」、そして円卓セッション1、「ネイチャーライティング——最近の成果から」2、「ASLE日米環境文学シンポジウム報告」と続き、夕方まで熱心な議論が交わされました。

さらにその後、網走在住のナチュラリスト（『大雪山ヒグマ物語』

の著者）小田島護、若松美智子氏による特別企画「紅葉の支笏湖と千歳川」が催され、翌日午後までハイキングやカヌーに興じた方々もおられました。

総じて、今回の大会では日本の作品への関心や、動物文学の問題のような具体的なトピックが目立ち始めている点が注目されます。また、ASLE-Japanの大会の中にアウトドア活動を導入するという新しい交流の形も本学会の今後を示すものでしょう。

最後に、すべての方のお名前を挙げることはできませんが、企画、運営、司会、そして発表に携わって下さった方々に謝意を表します。とくに地元北海道のメンバーの方々、有難うございました。また大会開催に対し助成金を賜りました札幌大学の関係者の方々にもお礼申し上げます。第3回大会は慶応義塾大学（東京）で開催される予定です。

◎事務局より：

1) 事務局移転についてのお知らせとお願い

事務局が金沢大学教育学部より下記に移転いたしました。移転に前後して事務が大幅に停滞いたしましたことをご詫言申し上げます。とくに、目下新しい事務局体制を確立するべく努めております。どうぞよろしくご願ひ申し上げます。

新事務局：

ASLE-Japan/文学・環境学会 事務局

住所：〒171 東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学 大学教育研究部 野田研一研究室

FAX: 03-3985-0279(大学教育研究部)

E-mail: noda@rikkyo.ac.jp

ニューズレターの5号の発行が大幅に遅れました。これも事務局活動の停滞によるものです。深くお詫言申し上げます。

2) 本年4月現在、会員数は163名です。ほぼ昨年同時期の2倍近い数となっております。とくに最近は大学院生、日本文学研究者の方々が増える傾向にあります。新しく入会された方々の積極的な活動、助言、提案、なんでもけっこうです。事務局宛お寄せ下さい。ニューズレターへのご寄稿もお待ちしています。

3) 96年度札幌総会で議論されましたが、機関雑誌の刊行や各種出版企画などを目下役員会で検討しています。ご意見などありましたらお寄せ下さい。

4) すでに97年度大会の準備に入りました。本年は慶応義塾大学で10月12日(日)～13日(月)の予定です。

5) 96年度札幌総会で新役員が選出されました。詳細はニューズレターでお知らせします。

◎1997年度スケジュール

5月24日(土) 今年度第1回役員会(仙台市)

6月上旬 ニューズレター第5号発行

7月上旬 ゲーリー・スナイダー氏を囲む集い(関連情報として下記参照)

8月下旬 大会研究発表応募メー切(要領6月中旬送付)

10月12日(日) ASLE-Japan/文学・環境学会97年度大会
～13日(月) 会場：東京 慶応義塾大学三田校舎

◎関連行事案内

1) ゲーリー・スナイダー朗読会(Gary Snyder's Poetry Reading)

「山河にうたう」 7/5(土) 草月ホール 午後7:00～
シンポジウム(Symposium) 「共創のコスモロジー：大地母神の力」

7/6(日) 草月ホール 午後2:00～

問い合わせ：草月ホール Tel. 03-3408-9113

*ASLE-Japan主催による、スナイダー氏を囲む集いを計画中です。

2) パトリック・マーフィー氏来日(Professor Patrick Murphy)

9月上旬、エコクリティシズムの論客として活躍中のマーフィー教授(インディアナ大学ペンシルヴァニア)が昨年に続き来日予定。今回はフルブライト招聘教授として1年間琉球大学に滞在。講演や集中講義などの依頼希望がありましたら下記までご連絡下さい。

連絡：琉球大学 山里勝己氏まで

◎研究発表募集！

ASLE-Japan/文学・環境学会第3回全国大会

Call for Papers at ASLE-Japan 3rd Annual Meeting in Tokyo

前記全国大会での研究発表をご希望の方は8月20日までに「タイトル」と「要旨」を添えて下記へご連絡下さい。発表内容によってはシンポジウム形式、円卓セッションにすることもあります。その際には改めてご相談します。個人、共同、グループを問わず奮ってご応募下さい。また、写真その他文学以外のメディア、ジャンルに関するものも積極的にご提案下さい。展示室も用意する予定です。

必要事項：

- 1) タイトル+要旨【約400字（日本語）、または250語（英語）】
- 2) 氏名、所属、住所、電話番号、ファックス番号、E-mail番号を明記して下記連絡先までお送り下さい。

連絡先：太田雅孝（大東文化大学）

〆切：1997年8月20日

◎Daily Yomiuri Project/公募要領

このほど、英字新聞The Daily YomiuriよりASLE-Japan/文学・環境学会に対して、同紙月例特集「日本人からの発信—地球環境時代に向けて」（毎月1回、計10回～12回）への協力依頼がありました。ASLE-Japan役員会は、特集の意義を評価し、この特集への積極的参画をさきの役員会で決定しました。依頼内容は大まかに次のようなものです。

1) アメリカン・ネイチャーライティングの傑作パッセージ（一節）を選ぶ。＊美しい自然描写や表現、自然環境への意識を喚起する表現など。

2) その日本語訳を付ける。

3) 作家略歴を付す。（日本語）＊依頼内容はこの特集のための広告欄（紙面1ページの約3分の1）に使用されます。

そこでこの企画のために、3回目以降の作品選択をASLE-Japan内の公募とし、会員各位のご協力をお願いすることにしました。（時間の制約上、1回目と2回目用の原稿は下記「企画編集委員会」によって作品選択作業を行います。ご了承下さい）ASLE-Japanでは代表、副代表、会誌編集委員を中心としてこの企画のために「Daily Yomiuri企画編集委員会」（野田研一、高田賢一、大神田丈二、上岡克己、山里勝己）を設置し運営に当たります。応募・執筆要領および注意事項は以下の通りです。熟読の上、積極的な参加をお願いします。

【応募・執筆要領】

- 1) 下記リストにある作家・作品名を確認の上、特集にふさわしい、あるいは自然や地球環境への意識を喚起するような当該作家のノンフィクション作品の一節を選択・引用し、日本語訳を付す。
- 2) 作品の出典を明記する。（著者名、書名、該当箇所ページ、出版社、出版年）
- 3) 選択・引用箇所をもっともよく説明するキーワードを付す。
- 4) 選択・引用箇所の長さはおよそ5行から20行の範囲を目安とする。
- 5) 特集との関連はとくに考慮しなくとも良い。
- 6) 作家略歴を100字以内で記す。（生没年、代表作、傾向など）
- 7) 和訳は自訳に限る。（他訳を利用した場合は不採用になります）
- 8) 応募原稿には英文字数、日本文字数を明記する。応募点数は一人一点に限る。
- 9) 採否の結果は直接通知しない。応募原稿などは返却しない。

10) 内容について変更・訂正を依頼する場合がある。

11) 〆切：1997年8月20日（水）

12) 応募先：上岡克己

原稿はE-mailもしくはフロッピー・ディスク（マッキントッシュによる読み込み可能なファイルで）。手書き派の方は知己の協力を仰いで下さい。印刷原稿3部を添えてお送り下さい。

【注意事項】

- 1) この企画へのThe Daily Yomiuriからの謝礼はすべてASLE-Japan/文学・環境学会に帰属するものとする。（会員よりの寄付として扱うことを役員会で決定）
- 2) 選考は「企画編集委員会」で行う。選考結果については委員会に一任する。（委員会では選択箇所、日本語訳の適否などを主な基準として審査します）
- 3) 著作権、特集継続回数などの理由で掲載そのものが不可能になる場合がある。
- 4) 応募者は原則としてASLE-Japan/文学・環境学会会員とする。
- 5) 応募のない作家の場合については編集委員会の責任で作業を行う。
- 6) 「企画編集委員会」は、すべての応募者が上記応募要領1)～11)および注意事項を了承されたものと理解します。

【作家リスト】

1. John Muir / 2. M. Austin / 3. H. Beston / 4. Rachel Carson, Silent Spring. New York: Houghton Mifflin, 1962. /
5. Edward Abbey, Desert Solitaire. New York: McGraw-Hill, 1968. / 6. Annie Dillard, Pilgrim at Tinker Creek. New York: Harper & Row, 1974. / 7. Barry Lopez, Arctic Dreams: Imagination and Desire in a Northern Landscape. New York: Scribner's, 1986. / 8. Gary Snyder, The Practice of the Wild: Essay by Gary Snyder. San Francisco: North Point press, 1990. / 9. Robert Finch, Common Ground: A Naturalist's Cape Cod. Boston: Godine, 1981. / 10. Terry Tempest Williams, Refuge: An Unnatural History of Family and Place. New York: Pantheon, 1991.



ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter

No.5

1997年6月16日発行

【発行】

ASLE-Japan/文学・環境学会
事務局：立教大学 大学教育研究部英語科
野田 研一

〒171 東京都豊島区西池袋3-34-1

E-Mail: noda@rikkyo.ac.jp

【編集】

編集代表 大神田 丈二